



横井春野著

百人一首の研究

全

附歌留多のならべ方及取方法

元祿會發行

例　言

— 小倉百人一首の歌留多を遊ぶ人は甚た多いが、歌留多の歴史や解釋を知つてゐる人は少ない、例へば「世の中よ道こそなけれ思ひいる山の奥にもしかぞなくなる」ご歌を讀んで、歌留多を取つて居るが、其意味の何たるを知らずに取つてゐる者が多いのである、恰かも謠曲を謠ふ者は多いが、一番の謠の大意にも通ぜず、又謠曲の精神の何たるかをも解せずして謠つてゐる者が多いのみ同じである。是れ笑ふ可きの至りである、余が本書を著せる所以又こゝにあり、

— 歌留多は室内遊戲として、文學的でよいものであるが、これを悪用するの弊風がある、余は主として「少年教育」ご謂ふ立場からして、相當の監督者なくして、少年を歌留多會へ出す事に絶對的に不賛成である、少年の墮落は國家將來の上から見て由々敷一大事である、墮落の主因は家庭が不規則で、自由に外出させるからである、特に相當の監督者なくして夜、外出させる事は、全國の各家庭に於いて嚴禁してもらひたい、隨つて少年を、夜、行はれる歌留多會

へ出す事も適當な監督者のない限りは、嚴禁して頂き度い、歌留多遊びは父兄監督のもとに、自宅でやれば事足れりである、この主義を一般家庭に、知らしめんこ欲せしも本書を著せる一因である、

一 余に「少年教育」の一機關がある、號して元祿會と謂ひ、八年前に余が創設したもので、雑誌、謠曲、歴史、辨論、遠足、野球、繪畫、考古の各部を有して居る、本書は主として元祿會員の爲めに編したものであるが、世間一般にも廣めたる、多少世人を益するであらふと謂ふ老婆心からして公けにしたのである、

一 近時書籍の出版は山の如くに多いが、多くは體裁を飾つて内容の貧しいものゝみである、余は是らの書籍を稱して「室内裝飾的」と謂ふて居る、過日余は能樂新報紙上へ「謠曲物語」の評を掲げた時「室内裝飾的のもので、見るに足らぬ」と謂つたがこの意味合ひである、本書は體裁の美に重きをおかずして、内容の豊富と謂ふ事を主眼として居る、是れ本書の特色たるもののみならず我が元祿會出版部の特色である、

一 本書の主とする所は歴史と解釋にあつて、雜篇の如きには重きをおかなか

つた、余は百人一首の歴史及び解釋に就いての材料を澤山、持つて居るが、萬事簡單明瞭を主とした本書に於いては、詳細の點まで述べる事は出來なかつた、依つて百人一首の科學的研究に從事せんとする人は、本書を讀んで、概念を得、更に幾多先輩の書に依つて研究せねばならぬ。希望者あらば、余は、研究の便宜を與えてあけるつもりで居る、「四海皆兄弟なり」と、門戸を開放しておる余の事であるから、不審の點は遠慮なく御尋ね下さい、

一 本書出版に際し「興國之日本」主筆古定賢正氏、早稻田政學士田邊善包氏の助力を受けた事甚だ多い、特に記して同氏に其勞を謝するのである、

大正元年十月十三日

白銀臺菊の屋に於いて

著者 橫井鶴城しるす

百人一首の研究目次

第一	百人一首の歴史	一
(一)	百人一首の意義	一
(二)	選者	一
(三)	歌留多となりし時代	一
(四)	維新前の百人一首	三
(五)	維新後の百人一首	四
第二	百人一首の解釋	五
第三	百人一首雑編	九
(一)	カルタ取の準備について	六六
(二)	排列法(カルタの排べ方)	六六
(三)	取り方法	七三
(四)	百人一首に對しての諸注意	八三
		八四

學生とカルタ	八四
カルタ會について	八四
(ハ)(ロ)(イ)	
読み手に對する注意	八五
(ニ)	
審判官に對する注意	八七
(ホ)	
カルタの札について	八七

百人一首の研究

横井 春野著

百人一首の歴史

正月の遊びとして先づ指を屈すべきはカルタ遊びなり。カルタとは元來イスパニア語の *Carta* 若くは英語の *Card* 然らずは古言の「かりうち」より轉せしものならんと云ふ。何れが是なるか判じ難しこは云へイスパニア語の轉せしものならんとの説正しきが如くに思考さる。然れ共カルタとはいこ廣き名にて様々のカルタあり。即ち花骨牌、いろは骨牌、西洋骨牌歌カルタ(歌カリタ)是なり、而して歌カルタにも數多の種類あれ共、普通歌カルタと云ふ者は即ち百人一首のカルタなり。こゝ數年間しこれが流行は夥く老若男女を問はずカルタ遊びに正月をくらす。この時に當りて百人一首の由來を知るはいと興あることなり。以下項を分ちてその大略を書いつけん。

一 百人一首の意義

百人一首とは百首の歌を各人につき各一首づゝ選みたるの意なり。かく各人一首づゝ百首歌を集むることはこの百人一首がもとなれど、既にこれ以前に百首歌はありき。冷泉の朝源重之は四季、戀雜と百首歌を獻じぬ。この後堀川、鳥羽の朝に至りては太郎、次郎の百首歌を召されしかば百首歌は大いに流行し始めぬ。これが因となり百人一首は生まれしなり。各人一首づゝ百首歌を集むる事は、この百人一首を始めとなす。後には之に倣ひて新百人一首、後選百人一首、源氏百人一首など云ふもの數多出來しかば、これらご別たむ爲に特に小倉百人一首と呼べり。

二 選者

百人一首の選者については二説あり。一は藤原定家卿の選とし、一は蓮生法師の選とす、賀茂真淵翁

の如きは定家の選なりと断せられき。現今にても定家なりとの説中々に多し。然れども研究の結果蓮生法師の選なりと思考さる。

そも蓮生法師は下野の國の人にして俗名をば宇都宮頼綱と云ひき。頼綱は業綱の子にして彌三郎と稱す。元久元年「頼綱叛心あり」この疑ひを蒙りしが、幸に罪をばのがれぬ。然れどもかゝる浮き世に生き永らふるは頼綱の欲せざる所、こゝに於いてか法然上人の門に入り薦娶して蓮生と號す。かくて蓮生は山城國小倉山の山荘に居をしめて一意千心佛道を修業しぬ。佛道研究のひまゝ歌匠爲家の卿をさひ歌道を究めぬ。蓮生と爲家の交りはいや深く遂に爲家は人道の女婿となりぬ。この女こそ爲家の最初の妻なり。かの十六夜日記をもて其名高き阿佛尼は爲家の後妻なりき。入道はつれゞなる折々百首歌を選びこれを爲家卿の父なる定家卿にかゝしめ山荘の障子にぞはりける。そもそも古への障子は、今日の如き明り障子に非ずして、襖、衝立やうの物なれば、これに繪畫を描し又は色紙を貼して歌書きなど、風流を競ひあへり、されば、蓮生が、山荘の障子に百首歌を貼り、歌主の肖像を書きし事も、ここわりなり。

水蛭眼目に

「嵯峨の山荘の障子に上古以來の歌仙の似せ繪を描きて各一首の歌を書きそへたり云々」ごみゆるが如く、蓮生は歌主の肖像をも一々書きそへぬ。今の一の百人一首の読み札に歌と作者の肖像を描くは、蓋しこゝに起因す。さて百人一首は凡そいつの頃選ばれしか考ふるに定家卿の明月記文暦二年五月の條に

二十七日己未予本不_レ知_テ書_レ文字事_ヨ、嵯峨中院障子色紙形、故子可_レ書由、
彼入道懇切、雖_ニ極見若事_ハ、懇染_シ筆送_ル之古來人歌各一首、自_ニ天智天皇以來、
及_ニ家隆雅經卿、云々

ごあるにより文暦頃若しくは、それ以前の選なりと推察さる。この明月記の文によりてすら百人一首

の定家卿の選に非ずして蓮生法師の選なることは明かなり。

然れ共この百人一首は中古の歌人を残らず綱羅したりとは思はれず、隨分著名の人の歌にしてこのうちに入らざるもの多し。即ち作者の選擇は公平を欠きたるものと云ふべし、飛鳥井抄に「まことに二條家の骨肉、この歌を以て俊成、定家二卿の心をも採り知るべき事とぞ、師說侍りし」とあるはこの百人一首を定家の選なりと解し崇拜、讚嘆の結果、當を失せしの評にしてむしろ眞淵の「歌も、深くえらばれしものならねば、げに、いかにぞや覺ゆるも入りたり」とあるが過評なり。然れどもこれは蓮生が慰みごと、あえてとがむるに足らず、「ひともをし云々」と云ふ後鳥羽帝の御製及び順德院の「もゝしきや云々」と云ふ御製は、後世定家の子孫の附加せしものならんとの説あり。正しき説なりと思考さる。

是を要するに百人一首の歌を選せしは定家に非ずして蓮生法師なり。而して凡そは文暦の頃、なりと思考す。又百人一首の元祖蓮生は正元元年十一月十二日に卒しぬ。百人一首の選者は蓮生法師なり。さるを長く定家の選なりと誤解せられ居たりしは氣の毒なり、恰かも今日五流に行はるゝ謡曲の大半の作者は、世阿彌元清に依つて成されたる「應永を中心とする猿樂革命當時の役者の作文作曲なるを長く「謡曲文の作文は恐らく當時の僧徒ならん」と誤解せられしと同じ。即ち世阿彌以下の能役者は、文學史上、特質せらるべき人なるに、天下之學者皆、かへりみず、これと同じく蓮生法師が長く、百人一首の選者たるの、名譽を得ざりしは氣の毒なり、余は東京カルタ會諸士に、蓮生法師の、銅像建設を敢てすゝむ、これ、百人一首カルタの元祖として長く其名譽を傳ねんが爲めなり。

今のかルタとは方法全然異なるものなれども、古への遊戯に貝覆と云ふものありき。この遊びの進歩したるものに歌貝と云ふも歌のありき、こは貝覆の貝に繪をかゝずして、歌を書きしものなり。厚紙

にて造り、中にはぬりて金銀箔などを押したるものもありて、伊勢物語、あるは源氏物語などの歌を上、下にわかつて書きぬ。これを貝覆の如く圓く席上に並べ上の句一つ宛出して、それに合ひたる下の句を取り合せて、多く取りたるを勝とするの遊びなり。

又天正の頃西洋よりカルタ渡來せり。これ天正歌留多と云ふものにして、凡そは今のトランプに似たれ其、其描ける形象、符號は大いに異なり。枚數は四十八枚なりき。

即ち今日の如き歌留多取りの方法は、この歌貝の方法及び西洋渡來のカルタの法を混合してなりしものゝ如し。歌貝の分子八。西洋カルタ分子二の割合なり。

勿論大體の趣巧は、歌貝の進歩せしものなりと思考さる。是を要するに今日の如きカルタ取りの法は、徳川の初政に始まり漸次行はるゝに至りしこ思はる。

百人一首進歩の有様を圖解せば

貝 覆 // 歌 貝

百人一首のカルタ

西洋カルタ

四 維新前の百人一首

徳川の初政頃より今日行はるゝ百人一首の取り方は始まりぬ。天下太平となるにつれて、國民の氣風も、戰國的氣風を脱し漸次溫和となりぬ。百人一首はこれと共に盛んになりしものと思はる。新百人一首と云ふもの、明暦年中に出版せられぬこのほか百人一首に關する著述は漸次多くなり天保、嘉永の頃に至りては中々盛んとなりぬ。

嘉永の頃、綠亭川柳と云ふもの出で、贈答百人一首、英雄百人一首、烈女百人一首、秀雅百人一首、義烈百人一首なるものを編せり。小倉百人一首のほかに、これらの百人一首の續々出來しより察すれば、當時カルタは上下一般に行はれしものとみゆ。

其他名所百人一首、當代名家百人一首等さまぐあり。川柳案の百人一首は餘り有益なものに非ず。奥山のやつほの椿 君が代に

「幾たびかげをかへんとすらん」と云ふ左衛門基俊の歌に始まり

「加茂秀麿」の

沖津島云々の歌に終るは川柳の贈答百人一首なり。

これらのはものは皆、小倉百人一首に敵すべくもあらず。忽ちあらはれ忽ち消ぬぬ。

取り方は種々なりしが、大體は二つなりき。一は上の句を讀みて下の句を取る法、一は下の句を讀んで下の句を取る法なり。元祿時代には盛んに、上の句を讀んで下の句を取る法行はれたり、(現今にても處によりては下の句を讀みて下の句を取る所あり。土佐の如きは然り)維新前一般に行はれしは「散し取り」に「組みわけ」(源平等なりき)。今日行はるゝが如く二人相對して、唯二人きりで、何枚と持ち札を定めて戦ふことはなかりしなり。

是を要するに百人一首の今日の如き遊戯法は徳川の初世に始まり、末世に至りて盛んに行はれしものと推察さる。又當時の武家令嬢達のカルタ遊びのあり様は左の書簡によりて推察さる。(この手紙は「娘子軍」にありき。津輕藩のことなり)

「歌かるたの時などは、誠にやさしきものにて「かいどり」をきたるまゝ致せしを見たるを覺え候。(女中の内には男子を加へず)うばひ取りなど云ふ事はなかりしやうに候へど、各自に武技の一つぐらゐは修めぬたりし如くにみえ候」

と、當今の世態と比較して如何なる感がある。

五 維新後の百人一首

王政維新の後も幸ひにして百人一首は憂きめをみず、相變らず、貴賤の別なく、もてあそばれたり。明治の初年、西村茂樹翁は百人一首中に基だ教育上面白からざる歌多くありて改正百人一首を出さ

れぬ、然れ共こは翁の理想に過ぎずして一般には用ひられざりき。翁は半數以上も歌をばかへられぬ。茂樹式百人一首の歌の數首を見るに。

僧正遍昭

たらちねのかゝれごてこそねば玉の

わが黒髪をなですやありけん

伊勢

年をへて花のかゝみとなる水は

散りかゝるをや曇ると云ふらん

素性法師

見渡せば柳櫻をこきませて

都ぞ春のにしきなりける

大伴の黒主

鏡山いざたちよりてみてゆかん

定家

年へぬる身は老いやしぬるど

駒ごめて袖うち拂ふかげもなし

佐野のわたりの雪の夕ぐれ

鴨長明

月も流れを尋ねてぞすむ

石川やせみの小川の清ければ

てふ如き中々面白きものなりき。然れども百人一首の改正など云ふことは好ましきことに非す。

百人一首史上特筆すべきは、三十年來の一大進歩なり。十數年前より、萬朝報補助のもとに、東京カルタ會なるものおこりぬ。一年に二、三回宛選手相會して技をねる云ふにあり。標準カルタなるものをつくりて盛んに活動しつゝあり。地方にも何會々々と名のつく團體數多あり。これ誠にカルタに取つては賀すべき事なり。又、カルタ稅法(三十五年四月)同施行規則(同年五月勅令)第一五四號あり、こはいろはカルタ、歌かるた及政府の認許を得たるカルタの他は製造及販賣は政府の認許をうけざる可らずとの主旨にして、百人一首と大なる關係あるものに非す。然れ共カルタの選手は「品性わるし」との評あり。中にはカルタは學生を墮落せしむるものなり、宜しく學生には嚴禁すべしと云ふ論者すらあり。これ決してカルタの悪しきに非るなり。これをなすものゝ悪しきなり。恰かも、野球は排斥すべし、排斥すべからずと論するが如し余は、野球を好む然れ共所謂選手とが號する者の如く、學業を二段として迄も野球に熱中する者を好み、要するに野球に害ありとすれば、野球其ものゝあしきに非ずして、之を行ふものゝあしきなり、これと同じく、カルタに害ありとすれば、カルタのあしきに非ず、之を行ふものゝ罪のみ、敢えて云ふ「カルタは文學的高尚の遊びなり」と、カルタも近來大分商賣じみ來りたり。吾人は業務をさいて迄もカルタを練習する人を好み、カルタの如き要するに慰みものゝみ。閑暇の時を利用して、これが研究をなすは誠に稱賛すべきなり。予はカルタをする人の「紳士的學生的」態度を飽くまで守られんことを希望す。以上予は簡略に百人一首の歴史を敍せり。本書の性質上、總べて簡略にしたがひしを以て、進んで、百人一首の科學的研究に從事せんと欲するの士は、猶一層の研究を要す、百人一首に關する古來著名的なる註釋本を掲げて讀者の参考に資す。

抄抄宗祇法師

加藤盤齊

抄抄

細川玄旨

辨蒙抄
像贊抄
函底記
秘
うひ學び
古說
解
嵯峨之枝折

申齊 隆德
平間 長雄
賀茂 真淵
荷田 東滿
栗本 英暉
新釋
異見摘評
百首證文
新註
間宮永好
等甚だ多く一々枚舉に遑あらず。

師說抄
拾穗補
基箭抄
一夕話
改觀抄
評釋
百首異見
峯之機
百首姿鏡
俚言解

北村
井上
秋翁
季吟
尾崎
雅嘉
沖
石原
山子
啟一
明
律師
衣川
長野
義言
香川
長秋
景樹
佐々木弘綱

八

百人一首の解釋

秋の田のかりほの庵の苦をあらみ

わがころも手はつゆにぬれつ、

天智天皇

〔傳記〕天皇は第三十八代の帝で舒明天皇の御子。御母は皇極帝である。御幼名を中心大兄、とも葛城の皇子とも申し奉る。御諱をば天命開別天皇と申し奉る。我國中興の英主にまします。

御陵は山城國宇治郡山科鏡山にある。此歌は萬葉集の

秋田刈る借廬をつくり吾れ居れば 衣手寒く露おきにける

と云ふ歌から脱化したものであらぶ。天皇の御製でないことは明かである。

〔字解〕かりほの庵。假庵の庵にていの母音の略されたのである。秋の田の稻を畠する人の居る小屋を云ふのである。苦をあらみ「苦が粗いが故に」と云ふ意。苦は菅茅にてつくり雨露を防ぐに用ふ。衣手 袖の事を云ふのである。

〔全意〕自分が畠をして居るこのかり庵は、苦屋根が粗いから自分の袖はこの通り露でぬれたわい。してみるこ番をするは頗る難儀なことである。の意

春過ぎて夏きにけらし白妙の

衣ほすてふあまの香具山

持統天皇

〔傳記〕天皇は第四十一代の帝で天智天皇の御女である。天武天皇の皇后であつたが帝の崩せられた後、位をつがれた。御陵は大和國高市郡檜隈明日香園に在る。光陰の早さを驚嘆せられた歌である。春すぎて夏きたるらし白妙の衣ほしたる天之香具山と云ふの

が、原歌である。

[字解] 春過ぎて 春も過ぎての意 けらし はらしいの意味 白妙の 衣の枕詞である。穀の木の皮で織つた布であるが、色が頗る白いから、衣、袖等の枕詞として用ゐる。てふは「と云ふ」の略言 あまの香具山 大和國十市郡にある、帝のぬました藤原宮からは近い。

[全意] まだ立つまいと思つたに、もはや春はすぎて夏になつたどみゆる。天の香具山に里人が白妙の夏衣を乾す所をみるとさう思へるわい。の意

あしひきの山鳥の尾のしだり尾の

ながぐし夜をひごりかもねん

柿本人麿

[傳記] 人麿は持統、文武の二朝に仕へて、歌読みとして知られた。官位は高くはなかつたが歌の名人と云ふので聖鶴に従つて、諸所をあるいた、後世歌聖として人麿を尊んでゐる。石見で死んだが、墓は大和國添上郡にある。

この歌が果して人麿の讀んだものであるかどうかは、疑問であるが、歌としては中々面白い。

[字解] あしひきの 山の枕詞である、日本紀には脚日本と書いてある。山鳥 雉に似た鳥である しだり尾の すぐれて長い尾のことを云ふ、長々し夜をいはんが爲めの序詞である 獨りかもねん かもは感動詞である。獨りでねるのかまあ の意。

[全意] 秋のこの長々しい夜を戀人と寢て明しもせず、獨り物淋しう寝るのかまあ我ながら淋しいことであるわいの意味。

田子の浦に打ち出で、見れば白妙の

ふじのたかねに雪はふりつゝ

山邊赤人

[傳記] 赤人は人麿と共に、二聖と云はれる人であるが、父祖の事はわからぬ。兎に角く、元正、聖

武の頃の人であることは確實だ。此歌は萬葉集に「田子の浦ゆうちにで、みれば眞白にぞ富士の高嶺に雪はふりける」とある歌の、少しく變じたものである。歌としての價値は頗る大である。味ひは言舌の外にある、富岳を讀める歌の中、第一位に位するものである。

[字解] 田子浦 地名である、駿河國庵原郡にあるうち 詞を強めん爲めの接頭語である。白妙の 此場合雪を形容す ふじの高嶺 富士山の事である。山は甲斐駿河の二國に跨つて、足柄、箱根の群山をしこねとしてゐる。高さ三、七八五米。我國第二の高山である。異名も澤山ある。有名なものを書いてみるに不二、不死、布士、時不知、四季鳴山、高根、羽衣、乙女、七寶、養老、戀ノ中山、芙蓉峯、八案岳等枚舉にいこまない。この山の如きは、地理學上、文學上、謡曲地理上著名である。明春、私は「富士と足柄の研究」と云ふ書物を出版するから富士についての研究は其方で見て頂きたい、雪はふりつゝ、つゝは餘情をこめた迄である。別に深い意味のあるのではなく。

[全意] 田子の浦から舟に乗つて海上に出て四方を眺めるごと、雪の眞ツ白に積つた富士山がみえるあゝ美しいことであるわいの意

おくやまに紅葉ふみわけ鳴く鹿の

こゑさく時ぞ秋はかなしき

猿丸太夫

[傳記] 猿丸太夫は其傳を詳にせぬ。推察するに猿丸は名、太夫は五位の通稱であらぶ。攝津國深草郷の人で、後近江曾東山中へ隠れた人であるとも、又は聖德太子の孫弓削王のことであらふとも云ふ。諭曲草紙洗に「シテさておことは古へ猿丸太夫のがれ云々」とある。傳は詳でないが、名世は高かつたとみえる。

〔字解〕 おくやまに。奥山は深山の意、即ち奥山にてと云ふ意である。紅葉 もみぢは草木の葉の霜にあひ黄又は赤になるを云ふ。名詞にも動詞にも使ふ。主に楓、はじ、はゝそ、ぬるで、つた、まゆみ、かき、などが紅葉するを云ふ。然し普通云ふは楓である。ぞ 是は強めの助辭で、聲きく時がと云ふ意である。

〔全意〕 秋は物さびしい時だ、其中でも奥山で紅葉の散つた上を啼きわたる鹿のこえをきく頃が、殊に悲しいわいの意、かさゝぎの渡せる橋におくしもの

白きを見れば夜ぞふけにける

中 納 言 家 持

〔傳記〕 家持は萬葉集を撰じたと云はれる歌人である。大伴の旅人の子である。位は從三位までのぼつた。延暦二年中納言に任せられ、同三年征東將軍を兼たが、同四年に薨じた。

〔字解〕 かさゝぎの渡せる橋 天漠の鵠橋のことである。淮南子に「鳥鵠墳河成橋渡織女」云々の故事によつたものとおもはれる。歌でも多く七夕に詠んで居る。鵠のよりはの橋 鵠のちかふる橋、鵠の行合の橋など、みえる鵠と云ふのは鳥の名である。おゝ霜 ふつて居ることの意 白きをみれば真つ白になつて居るのをみればの意 夜ぞふけにける。夜が更けたわいと、強めて云つたのである。

〔全意〕 はるかに天上をみわたすと、天漠の鵠橋のあたりに霜がみちて居る、してみれば夜は更たわいの意。

天の原ふりさけみれば春日なる

三笠の山に出でし月かも

安 倍 仲 磨

なつた。唐の詩人王維、李白等と交つた。唐朝に仕へて姓名を朝衡と云ふた。勝寶年中に我國へ歸らふと思ひ安南へ流された、そこで又唐朝に仕へ、終に故國をふまずして死んでしまつた。さぞ「日本が戀しかつたであらふ」此歌は仲磨が「日本こひしさに月をみて詠んだもので、あはれ深い歌である。後世の文人によく用ひられる歌である。謠曲野守に「むかし仲磨が／＼我が日本を思ひやり、あまの原ふりさけみるとながめける、三笠の山かけの月かも、夫は明州の月なれや」云々とある。これはほんの一例にすぎぬ。

〔字解〕 あまの原 はらこは凡て廣い場所を云ふ。天の原とは天のことである。ふりさけみれば「すつさ遠くみる」と云ふ意味である。春日なる 春日にあるの意、春日は誰れもしる如く、大和國にある。三笠山 春日の里にある山だ。春日神社の背、春日山のことである。出でし月かも かは疑の助辭、もは感嘆詞、つまり「出た月かまあ」の意。

〔全意〕 大空を見渡すと、おもしろく月がさし昇るが、あの月は自分が春日にいた時、三笠山に出た月と同じぢやない。それにしても我が故郷がこひしいの意。

わがいほは都のたつみしかぞすむ

世を宇治山ご人は云ふなり

喜 撲 法 師

〔傳記〕 六歌仙の一人である。その父祖はたしかめ難い。宇治山に隱棲してたとの説もある、古今集序に「宇治山の僧喜撰は詞かすかにして、始終たしかならず、いはゞ秋の月をみるに、曉の雲にあへるが如し」とある。兎に角く名ある歌人であつたことは慥た。喜撰のほか、窓仙、基泉など、も書く、この人の歌はこの一首よりほかは世に傳らぬ。

〔字解〕 わが庵は 我が庵はの意、庵とは極めて質素な家で、草や木を結んでつくつたものである。字都のたつみ 唯方角を云ふたのみである しかぞすむ 然ぞ住むの意。庵ぞすむの意ではない。字

治山 京都から四里許の所にある。絶頂は少し許りの平地だ。眺望は頗るよい。喜撰岳と云ふ。文學地理上有名な所である。

〔全意〕自分が住んで居る庵室は、都の東南の方にある、世の人はさぞ憂いことであらふと云ふが、拙僧は住みなれた事故、ういともつらしこも思はぬわいの意。

花の色は移りにけりないたづらに

わが身世にふる眺めせしまに

小野 小町

〔傳記〕小町の父祖もわからぬ。父は出羽の郡司小野良實であるとか、祖父は參議黨であらふとか云ふ、又或る人は「古今集中に小野真樹と詠みかはした歌があるから」小野真樹の親類ではあるまいとかと云ふ、絶世の美人で和歌は頗る得意とする所である。六歌仙、三十六歌仙の一人である。古今集序に「小野小町はあはれるやうにて強からず、いはゞよき女のなやめる所あるに似たり」とある。小町の事は後世戯曲小説に澤山書いてある。謡曲の中にも鶴鳴小町、草紙洗、關寺小町、通小町、卒都婆小町、高安小町、富士見小町、夢見小町、玉津島小町、山本小町など、澤山ある。(卒都婆以下は今日謡はず)

この歌は頗る調のよい歌である。にの字が四つあつても、耳ざわりにならぬ、こゝらが小町の小町たる所であらふ。

〔字解〕花の色は花によせて我が身の姿を云ふたのである。移りにけりなは感嘆詞、移つてしまつたの意。いたづらに無益にと云ふ意、我が身世にふる年寄ることを云ふ。又ふるは長雨の縁語である。長雨せしまにうつどりこして居る間に」と云ふ意。

〔全意〕何とはなしに、我が身の年よることを嘆いて居るうちに、長雨が降つて、花の色は移つてしまつたわいとの意、花によそへて、我が容貌のうつりゆく、有様を、嘆いた歌である。

これやこの行くも歸るも別れては

知るも知らぬもあふさかの關

蟬

丸

〔傳記〕父祖姓氏とも詳かでない「延喜第四の皇子也」と云ふのはどるに足らぬ説ぢや。(謡曲蟬丸などは延喜の皇子にしてある)今昔物語に依れば、宇多天皇の皇子式部卿敦實親王の難色で、盲目となつてから、逢坂山の麓に住み、琵琶を楽しんでゐた。博雅三位は、其秘曲をおばねんと思ひ、三年の間、通つて始めて秘曲を得たとの事である。歌としての價値は頗る大である、昔の逢坂の關の有様が、眼の前へ浮んでくる。

〔字解〕これやこの此れが彼の云々の關であるかと、結句につけて見る句である 行くも歸るも行く人も歸る人もと云ふ意、わかれては 後撰集には別れつゝとあるつゝの方が正しいと思ふ 知るも知らぬも 知る人も知らぬ人の意 逢坂の關、京都と大津との間にある關所である。昔はこゝで往來の人を檢したるものである。街道には蟬丸祠がある。嘗ては、この關以東を關東と云ふたことがある。

〔全意〕これがあの都を出て、田舎へゆく人も、歸る人も、ここで別れて、又逢ふと云ふ名の逢坂の關であるかと云ふ意。

和田の原八十島かけて漕ぎ出ぬご

人には告げよあまのつりふね

參議

篁

〔傳記〕小野穴守の子である。世に野相公と稱し、歌に巧みである。特に巧みさせられたのは、文章と詩である。承和年中に遣唐副使となり、大使藤原常嗣と心よからざる所あり、病ひなりと稱して行かなんだ。嵯峨天皇の怒りに觸れ、隱岐の國へ流された。後數年にして召し歸され、參議に任せられた。仁壽二年十二月に卒した。

この歌は感哀深い歌である。万里流滴の身となり、公然と音信をする事は出来ぬ。唯僅に一片の漁舟に託して、心の思ひをのぶ。誰れしも、あはれを覚えるであらふ。

〔字解〕 わだのはら 大海の事である。八十島かけて多くの島々の方へむけての意。八十島とは、なにも八十に限つたわけではない、數多きを云ふたゞけである。人には告げよ 我が家人には告げ

よの意、あまのつり舟、海人の釣り舟よと呼びかけたのである。海士は漁業する人のことである。
全意】茫々として限りない、この大海を澤山ある島の方へむけて、今出發したと、云ふことを、都
の人達に知らせてくれよ、釣人達と云ふ意、音信を船頭達に頼むのである。

あまつ風雲の通ひ路ふきごぢよ
「女」の姿（ば）

乙女の姿しほしこめん

僧正遍照

傳記 遍照は俗名を良岑宗貞と云ひ、桓武天皇の皇子安世の子である。仁明天皇の寵臣であつた。天皇の崩後無情を感じ、佛門にはいつた。仁和元年に僧正の位にのぼつた。古今集序に「僧正遍照は歌のさまは得たれども誠少なし。たゞへば繪にかける女を見て、從らに心を動かすが如し」とある。六歌仙、三十六歌仙の一人である。

此歌は遍照が五節の舞姫の舞ひはてゝ、入らんとするを惜しんで、詠んだのである。五節の舞姫は當時の若殿原が大騒ぎをしたものである。業平の如きも「あかなくにまだきも月のかくるゝか山のはにげて入れずもあらなん」と詠んで居る、兎に角く五節の舞姫の有様が、眼の前へ、浮んでみえる。

字解 天の風 つはのと 同じ意味。天の風よとの意 雲の通り路 雲の中の通り路即ち通路と云ふ
全意 意、少女、年若く盛の女を云ふ しばしこゝめん 少しの間なりともとのやうの意。
あの面白、天女の舞い姿とも少くみて、そつ次く風よ。雲の通り路を次ぎはらつてくれよ

の意、要するに「そら吹く風よ少女の通ひ路をふきはらつてくれよ、しかすればもつと舞がみれる
からの意。

こひぞつもりりて淵となりぬる

陽成院

傳記 第五十七代の天皇で、清和天皇の御子である。御母は藤原高子である。天皇長じて遊戯度なく基經の諺を用ゐられない。幾程もなく位をおり給ふた。御陵は山城國愛宕郡神樂岡東陵にある。

字解 筑波嶺のみね
ねはみねと同じである。つまり山の頂きを云ふ。筑波山は常陸國にある。和名抄には豆久波と註し景行紀には菟玖波とある。山は別に高くはないが、兎に角く關東一の名山である。みなのが川 筑波山中にある。細流はあるが、末は櫻川に合する。戀そつもりて こひしい／＼の念が積つての意。淵となりぬる 思ひが積つて深い淵となつたの意、淵とは水の濁んで深い所を云ふ。

みちのくのしのぶもぢずりたれ故に

河原左大臣

傳記 源融公は嵯峨天皇の皇子である。從一位左大臣にまで昇つた。又東六條に河原院を營み、陸奥鹽竈の景を模し、鹽やく煙をたてゝ樂しまれた。これが故に世に河原左大臣と云ふ。この歌はこひ歌であるが、戀歌としては、いやみのない、上乘なものである、謡曲にも融々云ふのがあるが、河原院の故事を、もごして作ったものである。

〔字解〕 みちのく みちのおくのおが略されたのである。陸奥國を云ふ。しのぶもぢすり、しのぶすりとも云ふ。古へ布帛に忍艸の莖葉を種々の色ですりつけた。これを云ふのである。其文の亂髪の如く捩れたのをもち摺と云ふのである。陸奥國の信夫にかけて云ふたのである。誰れゆゑに さりもなをさす君故に云ふ意を含んで居る。われならなくに 我れにあらぬにの意。

〔全意〕 他の人故に心が亂れ始めたのではない、君故にこそかやうに我が心は亂れそめたのである。さりとてはつれなきことよの意。

君が爲め春の野に出て、若菜つむ

わがころ手に雪はふりつゝ

光孝天皇

〔傳記〕 第五十八代の天皇で、仁明天皇の御子である。陽成帝が御位を遅れ給ふた時に基經らが迎へて位にすゝめ申した。御陵は山城國葛野郡後田邑に在る。天皇の御製としてはこの百首中最も勝れた歌である。

〔字解〕 君が爲め 君に贈らふがための意 若菜つむ 若菜を摘むの意。わが衣手に 自分の袖にの意 雪はふりつゝ つゝは餘情を以て結んだのである。

〔全意〕 君に贈らふと春の野邊へ出て若菜をつむ、この私の袖には、雪がふりかかるつてくる。難儀なことであるわいの意。

たち別れいなばの山の峯におふる

まつごしきかば今かへりこん

中納言行平

〔傳記〕 行平は平城天皇の皇子、彈正尹四品阿保親王の子である。かの有名な業平の兄である。天長三年に在原と云ふ姓を賜つた、中納言兼民部卿まで出世した。寛平五年に年七十六で卒した。この歌は行平の特徴を遺憾なくあらはした、誠に面白い歌である

〔字解〕 いなばの山 因幡國法美郡に在る。この山下國府村は行平の官舍のあつた所である。立ち別れて往ぬるの意に因幡を云ひかけたのである。峯におふる 頂上にはねて居るの意 待つごし聞かば 待ちて居ると聞くならばの意。いま ちきに云ふ意
〔全意〕 我は今汝と別れて、因幡國へ出かけるが、其國の稻葉山の頂きに、はねて居る松の名の如く、汝が我を待つごくならばすぐ歸りきやうの意である。

ちはやふる神代もきかず龍田川

からくれない水くゝこは

在原業平

〔傳記〕 業平は行平の弟である。世に在五中將と稱す。六歌仙三十六歌仙の一人である。歌のみならず、書も得意であつた。兄行平も歌に書に巧みであつた。兄弟そろつて風流人である。容姿閑麗當時の風流男である。古今集序に「在原業平は其心餘りて詞たらす。しばめる花の色なくて、にはひ殘れるが如し」とある。元慶四年五月、年五十六で卒した。
この歌は、書題の歌であるから、實景實物を顧みずして詠んだ。當時の書の不器用さかげんがわかる〔字解〕 ちはやふる 遠速ぶるの約されたものである。神又は宇佐の枕詞、神代も 神代にもの意 神代とは神武帝御治世以前を云ふ たつた川 大和國平群郡にある、紅葉の名所である からくれない。韓國より傳はつたくなゐて染色の好きにつけて云ふ、後世では「から」云ふ文字をつけて、珍らしいものに云ふ。例へば唐衣など云ふ、先づ今世で舶來と云ふと同じである。くれなるは吳の藍と云ふ意である。水くゝるとは 水をくゝりぞめにするとはの意。
〔全意〕 いろ／＼珍らしい事のあつたと、云はれる、神代でも立田川の水を紅のくゝりぞめにしむることはない。この繪の有様は、恰かも紅の絞であるわい。さても美事なる哉と稱賛したのである。

すみの江の岸による浪よるさへや

ゆめのかよひ路人めよくらん

敏行朝臣

[傳記] 敏行朝臣は藤原不比等の孫富士麿の子である。位は從四位上右兵衛督に至つた。書歌は其巧みとする所である。昌泰元年十一月はじめ賀茂の臨時の祭りの時「千早振かもの社の姫小松よりづよふこも色はかはらじ」と詠まれた。この歌は今に傳へて有名である。近喜の頃村上天皇が我朝の書の名人は誰なりやと、道風朝臣に尋ねられた時、道風は空海と敏行こそ上手にて候と答へられた。兎に角く書道の達人である、殘念なる哉、二十七で卒した。此歌も戀歌である。人間の情がよく現れて居る。男女の戀の真情を吐露した歌である。

[字解] すみの江 摄津國住吉郡にある。岸による波 岸に打ち寄る浪と云ふ意。これは下句のよ、と云はん爲の序詞である。よるさへや 寄ることを、夜にいひかけたのである。さへはそへの轉で一つある上に、又一つ加はる意の助辭である。ゆめの通路 戀ひしき女の許へ通ふごみる夢の中の通り路をさす よくらん らんは推量の助動詞、よけるであらふの意。

[全意] 曲間のうちに女の許へ通ふならば、人目もさけるべきであるが、何故夜夢にまでも人目をさけるのであらふか。と嘆いたのである。

なには湯みじかき蘆のふしの間も

逢はでこのよを過ぐしてよこや

伊

勢

[傳記] 伊勢は伊勢守藤原繼陰の女である。七條後の宮人たりし時、伊勢守の息女たるにより伊勢と呼ばれた。後に宇多天皇の皇子を生み奉つてから、伊勢御息所とも、伊勢の御とも云はれた、和歌は其得意とする所、三十六歌仙の一人である。

[字解] なには湯 摄津國難波の海である、湯とは海岸の遠淺で潮来れば隠れ、潮去れば現はれる地

を云ふ。みじかきあしの これは甚だ短いことをいはんための言葉である。ふしの間も 少しの間もと云ふ意。逢はで 逢はすしての約言である 過ぐしてよこや 過ぐせと云ふ事かの意、てよは過去の命令をあらはす助動詞、やは疑の助辭である。

[全意] ほんの少しの間も逢はすして暮らせと仰せらるゝか。そんな事が出来ましやうや。たゞへ少しの間でも逢はずにくらすことは堪に難いことであるのに の意。

わびぬれば今はたおなじ難波なる

みをつくしても逢はんごぞ思ふ

元良親王

[傳記] 元良親王は第五十七代元成帝第一の皇子である。親王は有名な漁色家であつた。此歌は、思ひ入つた戀の情を吐露したものとは云へ、甚だ感心の出来ぬ歌である。天慶六年七月二十六日に、御年五十四で薨せられた。

[字解] わびぬれば 思ひわづらひ居りてはの意である。今はた。はたは又と同じ副詞であるが、意味が少しく強い、つまり「今はやはり」と同じと云ふ意。難波なる みをつくしこいはん爲めの序である。みをつくしても 自分の身を失ふてもの意。みをつくし、は遠淺の海の湯を示さんが爲めに其傍にたて置く材である。歌では多く「身を盡し」に言ひかける。逢はんごぞ思ふ 逢はうご思ふと云ふ意。

[全意] このやうに思ひわづらつて苦しむも逢つて愛いつらい目をみるも、今は同じことであるよ、まゝよ命を亡くしてもそなたに逢はうと思ふわいの意。

今こんごいひしばかりになが月の

有明の月を待ちいづるかな

〔傳記〕 素性法師は僧正遍照の子である。清和天皇に仕へて右近衛將監となつたが、感する所あつて僧となり、雲林院に住した、又石上良因院に住した、三十六歌仙の一人である此歌は婉曲にして調のよい歌である。

〔字解〕 今來むと 俗にヂキニコツと云に當る いひしばかりに 言つたばかりにの意。ばかりは俗に程の意 なが月 なが月とは稻熟月の略とも、夜長月の意とも云はれるが、兎に角く舊九月の異稱である。ありあけの月 舊十六日以後の月の事であるが、この歌の意味から考へるごと、こゝでは二十日以後の月の事を云ふて居る。待ち出でつる哉、待ち出でつる哉である。

〔全意〕 暮れたなら、やがてゆかうと約束してあるから、今や來るかと待つて居る中に有明の月を待ちて、月は出たが、戀しい人は來ないかなあの意、戀の心がよくあらはれて居る。

吹くからに秋の艸木のしをるれば

うべ山風を嵐ごいふらん

文屋 康秀

〔傳記〕 康秀は文武天皇の皇子二品長親王の後裔である事だ、和歌は頗る巧みとする所、古今集序に「文屋康秀は詞たくみにて、其さま身におはず、いはゞ商人のよき、ぬ着たらんが如し」とある。六歌仙三十六歌仙の一人である。此歌は頗る單調な歌だ。上出來の歌とは思はれぬ。

〔字解〕 吹くからに「吹くとそのまゝ」と云ふ意、からは「に因りて」の意をあらはす接尾語である、うべ うべなう意の副詞で「なる程」といふ意味である。これを「むべ」とよむは感心出来ぬ。あらしこいふらん、あらしこ云ふのであらふの意。

〔全意〕 山風が吹くと秋の草木の萎れてしまふのを見るに、なる程、山の風を嵐と云ふのであらふかの意。

月みればちゞにものこそ悲しけれ

我が身一つの秋にはあらねど

大江千里

〔傳記〕 千里は參議音人の子である。又は音人の孫なりとも云ふ。中古三十六歌仙の一人である。天慶延喜の頃の人である。

〔字解〕 ちゞに さまぐにの意 ものこそ悲しけれ 物事を悲しく感ずるの意。こそは此場合意味を強めたゝけである わが身一つのわが一身だけの意 秋にはあらねど 秋ではないけれどの意。

〔全意〕 月を見るご種々の事が思ひ浮んで悲しくなる。我が身一つに限つた秋ではないが、、、、取りわけて自分は悲しく思はれるの意である。

このたびは幣も取あへず手向山

もみぢのにしき神のまにく

菅家

〔傳記〕 菅原道真公は參議是善卿の子である。儒生より起つて昌泰二年に從二位右大臣となつた、時に藤原時平等これをねたみ、道真を讒した。同四年太宰權帥に貶せられた。延喜三年二月二十五日年五十九で薨じた。後一條帝の正暦四年正一位太政大臣を贈られた。又元暦年間に至り、道真的靈をまつて北野神社をたてた。道真の名は千古に朽ちないのである。

〔字解〕 このたびは 今度の旅は云ふ意、此度ごこの旅をかけたのである。幣 御幣のことである。多くは麻、木綿、帛、紙、を用ゐる、こりあへず 用意もせずにの意である。手向山 大和國奈良町大字雜司にある。紅葉の名所である。もみぢのにしき 紅葉にてなれる錦の意、神のまにく 神の「御心まかせに」と云ふ意まにくは「儘にく」の略言である。まにくと云ふて餘情をこめたのである。

〔全意〕 此度びの旅行は天皇の御供で手向する幣の用意もせなんだ、幸ひ手向山の紅葉が錦のやうで

あるから、これを幣として神に捧げやう の意。

名にしおはゞ逢坂山のさねかつら

人にしられてくるよしもがな

三條右大臣

〔傳記〕 三條右大臣は藤原定方公である、延喜二年正月大納言より、從二位右大臣に昇任した。承平二年八月年六十で薨じた死後從一位を贈られた。

〔字解〕 名にしおはゞ名の通りであるならばの意。しほ強めの助辭、逢坂山 近江國と山城國との境にある山である。逢坂關のあつたのは此山である、「文學地理」上特に名高い。さねかづらさんは發語で根蔓の義かとも、又は萬葉集に核葛があるから實を賞する義だとも云ふ。然し山野に多くはねて居る蔓草である。又さねは小寢では發語、ねはねる云ふことで男女相寢ぬる名を負ふをいふのである。解する人もある。人に知られで他人に知られないでくるよしもかなくるすべもあればよいがなあの意、くるは女の来るに蔓を躍るをかけて云ふたのである。

〔全意〕 逢坂山のさねかづらが逢ふと云ひ、又は小寢と云ふ名を負ふて居る通りならば、人に知れないで、こひしい女の自分の許へ来るやうにして寢むすべもあればよいがなあの意。

小倉山峯のもみぢば心あらば

いまひこたびのみゆき待たなん

貞信公

〔傳記〕 貞信公は藤原忠平の諡である。かの時平の弟である。承平六年遂に太政大臣に昇つた。時平は延喜格式を撰び、業年にして薨じた。忠平はこれを完成し、格十二卷式五十卷を奉つた。天暦三年八月年七十で薨じた。

〔字解〕 小倉山 山城國葛野郡嵯峨の大井河の邊にある、袖中草分衣にも紅葉「音羽山小鹽山小倉山加茂山々々」である、古來紅葉の名所として有名である。こゝろあらば思ひやりがあるならば

の意、みゆき 天子には行幸と書き上皇には御幸と書く依つて謠曲でも「大原御幸」など、上皇法皇の時には御幸の字を用ひて居る。待たなん 待つて、くればよいの意、なむは願ひの助動詞、

〔全意〕 小倉山の紅葉ばよ 宇多上皇は小倉へ御幸なされ「行幸もありぬべき所なり」と仰せられた。それであるから今上天皇も、紅葉狩に御出ましになるであらぶが、思ひやりがあるなら今一回の行幸を散らずに待つて、くれよ の意。

〔附記〕

此歌は拾遺集雜部秋に「亭子院大井河に行幸ありて、行幸(醍醐天皇の)もありぬべき所なりと、仰せ給ふに、事の由奏せんと申して」とあるこれで歌の意味も明かになる。貞信公の君を思ふの情もゆかしく思はれる。古來忠臣の心は同じで、乃木の追腹も、これも同じである。

みかの原湧きて流るゝいづみ川

いづみきこてか戀しかるらん

中納言兼輔

〔傳記〕 兼輔は藤原利基の子で、冬嗣の曾孫である。正平三年二月年五十七で薨じた。歌は中々の上

手である。世に堤中納言と云ふ。三十六歌仙の一人である。

〔字解〕 みかの原 山城國相樂郡瓶原村である。古くは三日原、三香原、甕原、御香原と書いた。枕草紙に「原は竹原、甕原、朝の原その原云々」とある。兎に角く古來有名な原である。湧きて流るゝ湧き出して流れるの意である。湧くとは誰れも知る如くに、地中より吹き出すことである。いつみ川 瓶原と同所にある。こゝまでは「いづみき」と重ねていはん爲めの序である。いづみきとてか いつみきは何時見きで「いつみたごいふてか」の意、戀しかるらん 恋しいのだらぶの義である。

〔全意〕 見た事があるなら心に印象が残つて、こひしいと思ふ事もあらぶに、これは何時みたごいう

てこの様に戀しいのだらう。いと不審ぢやの意。
やま里は冬ぞさびしさまさりける

人めも草も枯れぬごおもへば

源宗千朝臣

〔傳記〕 宗干朝臣は光孝天皇の皇孫、一品式部卿是忠親王の子である、寛平六年從四位下に敍せられ天慶二年に至つて正四位下に敍せられた。三十六歌仙の一人である。甚だ趣きのある歌である。

〔字解〕 やま里、山家のことである。冬ぞ、強く冬をさす、人めも草も、人の見るめも草もの意。枯れぬごおもへば、人も來なくなり、草も枯れてしまふと思へばの意である。

〔全意〕 山里はいつも淋しい。然し冬は別して淋しさが増るわい。人も遠ざかうて來なくなり、草も枯れてしまふかと思へばマアの意。

こゝろあてに折らばや折らむ初霜の

置きまごはせるしら菊の花

凡河内躬恒

〔傳記〕 凡河内躬恒は、天津彦根命の後であると云はれる。醍醐天皇に召されて、御書所に候するところとなつた。古今和歌集の撰者となつた。三十六歌仙の一人である。兎に角く當時著名の歌人である。

〔字解〕 こゝろあてに推し量りにの意、折らばや折らん、折らば折られやうかと云ふ意、やご云ふ語疑の助辭、初霜のおきまどはせる、初ッ霜とは真つきに降る霜である。初霜がをりて菊の白花と混らはしくみするご云ふ意。

〔全意〕 今朝は初雪が眞つ白に草葉の上にをりて白菊の花ご見まがはせるから、それが白菊の花か霜か見分けがつかぬ。だが大概あて推量に折らば折られやうかまあ白菊の花の白い事よの意

有明のつれなくみえしわかれより

あかつき許り憂きものはなし

壬生忠岑

〔傳記〕 忠岑は從五位下安綱の子である。醍醐朝御書所に候した、歌は其得意とする所古今集撰者の一人として、又三十六歌仙の一人として有名である。此歌は難解の歌で古來諸説まち／＼ご云ふ有様だ。嘗て「古今集中の名歌を申せよ」その後鳥羽天皇の勅諭を承つて、定家、家隆兩卿ごもこの歌を上つたのは隨分不審である。

〔字解〕 有明の 有明けの月の如くの意、有明ごは月の天にありつゝ夜の明くるを云ふのである。即十六夜以後の月に云ふ、つれなく つれもなしと同じ詞で無情ご云ふ意味に當つて居る。われより別れし時からの意、よりはからご云ふ意味である、あかつきばかり 夜明け頃程の意、あかつきは夜の明くる頃を云ふ 憂きものはなし つらいものは外にないの意、
〔全意〕 かつて自分は戀しく思ふ人の許に通つたが、曉になつたら有明の月のつれなく残つたるが如く其人がつれなくみわたから、心ならずも別れて歸つた。それからは曉程ういつらいものはないわいの意、

あさばらけ有明の月ごみるまでに

よし野の里に降れるしらゆき

坂上是則

〔傳記〕 是則は坂上田村麿の後であるご云ふが、其父祖は詳かでない、和歌をよくし、三十六歌仙の一人である。此歌は調のよい歌だ

〔字解〕 あさばらけ 夜明け方の事である。有明の月ごみるまでに 有明の月ごみる位にの意、までにはクラキご云ふ意である。よし野の里、大和國吉野郡にある。吉野山は櫻の名所で、歴史上、「文學地理」上重要な所である。降れるは降りてあるの約言である。

〔全意〕朝ほのくと、夜のしらむ頃戸をあけてみるに恰かも有明の月の影かごみゆる程に、吉野の里に降つた雪ぢやなあの意、
山かはに風のかけたるしがらみは

流れもあへぬもみぢなりけり

春道列樹

〔傳記〕列樹は新名宿禰の子である。延喜二十年壹岐守に任せられた。當時相當の歌詠みで、あつたらしい。古今集の中にもこの人の歌はある。

〔字解〕山かは 山の間を流れる川である。かけたるしがらみ、椿へたる柵ご云ふ意、柵は流水の勢を塞かうが爲めに杭を連ね立てゝ、横に竹柴などをからみつけたものである。流れもあへぬ 流れおはせぬの意、もは汎く感情に發する語で、俗に云ふマアと同じである。紅葉なりけり 紅葉であつたわいの意、

〔全意〕山川に風の椿へたるご云ふ柵は外でもない、瀬の處々に流れもおはせずして水を堰いてゐる落葉であつたわいの意、

ひさかたの光のごけき春の日

しづ心なく花の散るらん

紀友則

〔傳記〕友則は有友の子で、貫之の従弟である。古今集撰者の一人として、又三十六歌仙の一人として著名である。此歌は頗る巧みな歌で、春の日の長閑な景色をうまく描寫してゐる。

〔字解〕ひさかたの 日差方の義とも、又は天虛なれば芭形の義なりとも云ふが、これは牽強の説である天の枕詞である、今では雨、月、星、など凡て天上の物の枕詞に用ゐる。光のごけき春の日に日のゆつたりとして麗しき春の日にの意 しづころなく 静心なきご云ふ意、即氣せはしくそはぐするの意 花のちるらん 櫻の花が散るであらぶ。のはがご同じ意味である。歌では一般に花

ご云へば櫻を指す)

〔全意〕大空の日の光りがゆつたりとして居る春の日であるのに、花は何故かく心せはしく散るのであらふかの意。

誰れをかも知る人にせむ高砂の

藤原興風

〔傳記〕興風は、道成の子で、院藤太と號した、延喜十四年下總權大様から相模守從五位下に進んだ、三十六歌仙の一人である。

〔字解〕たれをかも かは疑の助辭である、もは又感嘆の意をあらはす詞である。即たれをかまあの意味である。知る人にせん朋友ごせうの意、高砂の松もあの山の松でさへもの意。高砂は播磨の地名である、近傍は尾上ご云ふ名所があるから、常に高砂の尾上ご呼んでゐた。それが轉じて普通の山の尾の上にかけて唯山ご云ふ意に用ふるやうになつた。むかしの友ならなくに むかしなじみでないのにの意。

〔全意〕誰れを友として交らふか。自分は大變年を取つて昔馴染の人は一人も今は生きて居らぬ。あの向ふの山の松は年久しいものであるが、草木のことであるから話しも出來ぬ昔の馴染でもないわいの意、

ひこはいさ心も知らずふるさごは

花ぞ昔の香にほひける

紀貫之

〔傳記〕貫之は藏人望之の子である。延喜中御書所預となり、越前權少掾、少内記等を歴、大内記に轉じ、從五位下加賀美濃介となり、延喜中土佐守となつた。天慶九年從四位下で卒した。

古今集撰者の隨一である、古今集は貫之に依つて撰ばれたご云ふてもよい。貫之の假名文は天下後

世に著名である、古今集序、大井川行幸序、土佐日記等は頗る有名なものである。書も中々達者であつた。後世貫之を歌仙と稱し、柿本人麿と共に和歌の祖宗といはれる。三十六歌仙の一人である。この歌は頗る巧みな面白い歌である。

〔字解〕 ひこはいさ　主人はどうであらふかの意、いさは如何ならんと云ふ意味で、俗に云ふ「どうちや、ら」と云ふ意。下に必らず「知らず」と受けることにきまつて居る。心も知らず、心がはりせしか否かも知らぬの意、ふるさとは種々の意味にこれる（古く物のありし地「古里となりに奈良の都にも色は變らず花は咲きけり」の如し）（旅に居る人が其本地を指して云ふ語即故郷、舊里、三往時最初にゐたりし地、花ぞ、唯意味を強めただけである。むかしの香に匂ひける　もとのま、のよき香に匂うて居るわいの意、

〔全意〕 御主人の御心は變つたか如何か、わからん、然し昔馴染の宿の梅の花はもとの通り、相かはらず匂つて自分を迎へてくれたわいの意、

夏の夜はまだ宵ながら明ぬるを

くものいづこに月やごるらん

〔傳記〕 深養父の父祖は詳でない。延喜八年正月内匠大允に任じ、延長元年六月内藏大允に任じ、八年從五位下に敍せられた。中古三十六歌仙の一人である。

〔字解〕 胚ながら 初夜のまゝにの意。よひは初夜の事、明けぬるを 明けてしまふのをまあの意。をの字に餘情を含ませてある。雲のいづこに 晓の空にある雲のどの邊にと云ふ意である。やざるらん 月が宿るならんの意、らむは推量の助辭。

〔全意〕 夏の夜は短くて明けやすく、まだ初夜の中に明けてしまふ。あの面白い月は西の山まで入る暇もなからうものを、曉の空のどの雲の所にかくれたのであらふかの意、

しらつゆに風のふきしく秋の野は

つらぬきごめ玉ぞちりける

文屋朝康

〔傳記〕 朝康は康秀の子である。寛平四年正月駿河様に任せられ、延喜二年二月大舍人大允となつた。和歌は其得意とする所である。

〔字解〕 しらつゆに 草葉のおく露にの意、露は白く見えるから白露と云ふのである。風の吹きしく風の吹き頻るご云ふ意で、引きも切らず吹くことである。つらぬきごめぬ 露を玉ぞみて、それを緒にてぬき通さぬと云ふ意、玉ぞらりける 玉が散るわいの意、ぞは只意味を強めただけである。

〔全意〕 草葉の上における白露に風が引きも切らず吹く秋の野原には、緒にもぬき通しておかぬ玉が

散り布くわい。よつくみればこれはやはり露ちやの意。

わすらるゝ身をば思はず誓ひてし

人のいのちの惜しくもあるかな

右近

〔傳記〕 右近は右近衛少將藤原秀綱の女である。醍醐天皇の皇后七條后穂子に仕へた。歌は頗る巧みとする所である。此歌は頗るあはれ深い歌である。女の歌としては特にやさしく感せられる、女子の墮落せる今日かく誠ある歌を見る如に一種の感にうたれる、

〔字解〕 わすらるゝ 俗に忘れられるの意、らるゝの、るは受身の助動詞である。身をば思はず、身分のことをば何とも思はないでの意、誓ひてし人のいのちの てしは只其意味を強めた丈である。命をかけても忘れない誓言した人に、其誓言に背くならば、神の怒りを招き、命にもかゝるるであらふ故に其人の命がの意惜しくもあるかな。惜しくも思はるゝなあの意、かなは感嘆詞である。

〔全意〕 自らの事は忘れられてもよいが命をかけても忘れない誓言をたてたことであるから、その神罰で忘れた人の命はあるまい、あゝわれは、その人の命が惜しいのであるわいの意。

淺茅生の小野のしの原しのぶれど

あまりてなごか人のこひしき

參議

等

〔傳記〕等は中納言源希卿の子で、祖父は嵯峨帝の皇子大納言弘卿である、天暦元年四月廿六日に參議に任せられ、同五年正月正四位下に敍せられた。終ひに中納言に至つた。歌は其得意とする所である。此歌のもとは蓋し古今集の「淺茅生の小野の條原しのぶども、妹知るらめやいふ人なしに」であらふと思はれる。

〔字解〕淺茅生、茅の疎に生へて居る所を云ふ。あさぢおふの略言、然しこの場合野の枕詞である。小野の條原をは只接頭語である。を野で只野と云ふ意になる。しの原は小竹のはえた原で、別に地名ではない。唯しのぶれど、云はう爲めの序詞である、しのぶれど包みかくせどの意、あまりて思ひあまりての意、などか何故にかの意、人のこひしき汝が戀しいわいの意。

〔全意〕自分の胸中につゝみかくして、外にあらはすまいとするけれども何故に忍ひあまるまで、汝のこひしいことよの意。

忍ぶれど色に出にけりわが戀は

ものやおもふご人の問ふまで

平

兼

盛

〔傳記〕兼盛は是忠親王の曾孫にして、篤行王の子である。始めて平の姓を賜つた。歌に文に妙腕をもつてた。從五位上駿河守に至つた。正暦元年十二月に卒した。三十六歌仙の一人である。

〔字解〕忍ぶれどつゝみかくせどの意、色に出にけり。顏色にあらはれてしまうたわいの意。我が戀は我が戀をするといふことはの意、ものやおもふご人の問ふまで物思ひがありますかご人の問ふ程になつたの意、やは疑の助辭、此歌は「わが戀は忍ぶれどものやおもふご人の問ふまで色に出にけり」と解すればよい。

〔全意〕我が戀は人に知られぬ様に胸につゝみかくすべするけれど、何か物思ひをなさるかど、人の問ふ程に顔色にあらはれるやうになつたわいの意。

戀すてふ我が名はまだき立ちにけり

壬 生 忠 見

〔傳記〕忠見は忠岑の子である。歌を以て名天下にあらはれた。醍醐天皇召して藏人所に候せしめた。天暦中攝津大目どなり、六位を授けられた、三十六歌仙の一人である、天徳の禁中の歌合の際、忠見に兼盛の歌を配した。二人何れも秀逸であるから判者もほど／＼困つてた、時に天皇兼盛の歌を稱賛せられた。こゝに於いてか終ひに忠見の負けとなつた、忠見いたくこの事をなげき途ひに憂ひて死んでしまつた。今から考へれば滑稽にも思へるが、兎に角歌には熱心であつた人とみえる。

〔字解〕戀すてふ「戀をすると云ふ」の意で、ふは「と云ふ」の約言。我が名は我が評判はの意まだき立ちにけり、早くたつたわいの意、まだきは豫ての意である。人知れずこそ戀人にすら知れないやうにの意、こそは強く云ふた係り詞である。思ひそめしが思ひそめたりしにまあの意〔全意〕戀をすると云ふ我が評判は夙くも立つたわい。戀人すら、知られないで、我が心のうちだけで思ひそめたのにまあの意、

契りきなかたみに袖をしぶりつゝ

すゑの松山浪越さじこは

清 原 元 輔

〔傳記〕元輔は深養父の孫である。下野國守顯忠の子である。歌はその得意とするところ、大中臣能宣、坂上望城、紀時文、源順等と共に和歌所の寄人であつた、萬葉集に訓點を施し又後撰和歌集を撰んだ世に梨蠶の五人と稱す。正暦元年に年八十三で卒した。三十六歌仙の一人である。

〔字解〕 契りきな 契約したつたなあの意。なは感嘆の意をあらはす、詞である。かたみに 互ひと云ふ意、袖をしばりつゝ、涙に袖をしばりながらの意。すゑの松山 陸前にも陸奥にも、末の松山と云ふ所はある。然し宣長の曰く「末と云ふ所の松山なるべし」さ。浪越さじこは 浪も越すまいとはの意。心かはりすまいとの意である。

〔全意〕 前には互ひに涙に袖をしばりながら末の松山を浪が越さぬが如く、二人の仲はかはりはせぬと契約した事であつたがな。それを忘れて早すでに變つたわいの意。

あひみての後の心をくらぶれば

むかしはものを思はざりけり

中納言敦忠

〔傳記〕 敦忠は本院左大臣藤原時平の子である。歌をよくしたのみならず、音律に通じてゐた。かの有名な博雅三位と並び稱せられる。天慶三年に從三位權中納言に昇り、六年三月、歲三十八で卒した枇杷中納言と稱し、三十六歌仙の一人である。

〔字解〕 あひみての 互ひに相逢ひて見し後の意。心にくらぶれば 心の思ひにくらべてみればの意。むかしは逢はざりしさきはの意。ものを思はざりけり、物思ひをしなかつたわいの意

〔全意〕 思ふ人に逢つてから後の心に、逢はないで嘆きくらした時の心を比ぶれば、逢はぬ昔は物思ひをせずにつつたわいの意。即今の心の苦しさを嘆いたのである。即心情を吐露した歌である。

あふことの絶えてしなくばなか／＼に

人をもみをもうらみざらまし

中納言朝忠

〔傳記〕 朝忠は三條右大臣藤原定方の子である。應和三年中納言に昇り、康保三年十二月に薨じた。時に年五十八。世に土御門中納言と云ふ。三十六歌仙の一人である。此歌は天暦の御時の歌合の際、詠じたものである。

〔字解〕 あふことの 逢ひみるこの意 絶ゑてしなくば 絶えてなくばの意。しは強めの助辭。なか／＼に 却ての意。人をも身をも、戀人をも我が身をもの意 うらみざらまし 恨みないであらふの意、ましは推量の助動詞である。

〔全意〕 たまにでも、逢ふと云ふ事がなかつたら、逢はれぬと云ふて、先の人を恨んだり、又我が身を恨むやうなことはあるまい。逢ふは却つて恨をますもどであるわいの意、あはれごもいふべき人はおもほえて

身のいたづらになりぬべきかな

謙徳公

〔傳記〕 藤原伊尹公は右大臣師輔の子で、元祿元年正月に右大臣に任せられ、五月攝政となつた。同二年十一月太政大臣、正二位となつた。年四十九で薨じた。時に元祿三年十一月である。正一位を贈り、謙徳公と諡された。伊尹は頗る才のある歌人であつた。村上帝が後撰集を撰せしめられる時、伊尹を和歌所の別當とし、これを總裁せしめたとのことである。

〔字解〕 あはれごも 可愛さうぢや其の意、あはれは感動した時發する語である、おもほにて 思はれすしての意 身のいたづらに がはのと同じ意味である。身がむだ死ににとの意。なりぬべきかな なつてしまふだらふかなあの意、かなは感動の辭である。

〔全意〕 自分が戀ひ死すとも、あゝ可愛相ちやと思つてくれる人は、心變りして、あはれごも思つて由良の戸を渡る舟人楫をたえ

ゆくえも知らぬこひの道かな

曾根好忠

〔傳記〕 好忠は今を去る九百餘年の昔、即ち寛和年間、の歌人である。丹後様となつた。世人これを呼んで曾丹後又は曾丹と云ふ。中古三十六歌仙の一人である。

〔字解〕由良の戸 淡路にも丹後にもある。然しこの場合丹後の方を見るが、適當と思ふ。とは追門で海水の出入する所である。ふな人 檻取を云ふ 桿をたむ 桿尾が絶いたる如くにの意、楫を折るの意ではない。ゆくへもしらぬ 行きつくさきも知られないの意。どうしてよきやわからぬの意を含む 戀の道かな 戀の道なるかな之意。

〔全意〕由良の淡の船頭の楫緒がたてて何處へゆくやら、行くさきがわからぬが如く、どうしてよいやら我が身を慰めるすべもない、さても〜つらういのは恋の道であるわいの意。

八重むぐらしげれる宿の寂しさに

ひここそみえね秋はきにけり

惠慶法師

〔傳記〕惠慶法師の傳は詳でない、兼盛、時文らと交り、歌をよくよんだ。中古三十六歌仙の一人である。寛和ごろの人である。

〔字解〕八重むぐら 八重菴の意。八重は繁きを云ふので八と云ふ字と關係はない菴は蔓艸で蔓に刺のある草だ しげれる宿の 繁りてある宿のことである 寂しきに 寂しいによりての意、ひこそ見ぬね 人こそこのまあの意、秋は來にけり 秋は來たわいの意

〔全意〕菴がひどく繁つて荒れ果てた宿のさびしい上に、人も訪ひこぬ、淋しさを添ふる秋はきた、あゝ淋しいことであるわいの意

風をいたみ岩うつなみのおのれのみ

くだけて物をおもふころかな

源重之

〔傳記〕重之は清和天皇の皇子、貞元親王の孫で、從五位下侍従兼信の子である。歌は其得意とする所、三十六歌仙の一人である、この百首歌さねに浅からざる人である。長保年中奥州へ下り同地で卒した。

〔字解〕風をいたみ 風が烈しさにの意、風をのをは感動の助辭、岩打つ波の 岩にうちかゝる浪の意これはくだけてにかかる序詞である、おのれのみ 自身ばかり くだけて 色々と考へての意、心の碎くご浪の碎くるをかけたのである。物を思ふ頃かな 物思ひをする時であるかな之意、かなは例の感嘆詞である。

〔全意〕風が烈しく吹き浪が岩に當つて碎け散つても岩は平然としてゐるが如く、吾が思ふ人は何とも思はぬが、自分ばかりいろいろに考へて此頃は物思ひをたねずすることかな之意、

御垣守衛士の焚く火のよるは燃え

ひるは消えつゝ物をこそおもへ

大中臣能宣

〔傳記〕能宣は神祇祭主頼基の子で、歌は其得意とする所である。後撰和歌集の撰者、梨壺五人の一人として著名である。正暦二年に年七十一で卒した。三十六歌仙の一人である。

〔字解〕御垣守 禁裏を守護することである。衛士 古へ諸國軍團の中からわらばれて、京にのぼり、毎年交番して禁裏を守る士である 焚く火の 焚く篝り火の如くの意。夜營の爲めたくかゝり火の如くにの意、ひるは消えつゝ、晝は思ひに心も消え入りながらの意、一通りでない心の思ひを火にたぐへたのである 物をこそをおもへ 物をこそまあ思ふの意。

〔全意〕衛士どもが禁中を守るために焚くかゝり火の如くに、胸の思ひの火は、夜は盛んにもねてやむ時なく、晝は思ひに心も消え入りながら、物思ひをするわいの意

君が爲め惜しからざりし命さへ

ながくもがなご思ひけるかな

藤原義孝

〔傳記〕義孝は謙徳公の子で、天祐元年左兵衛權佐に任せられた。同二年左近衛少將となり、同三年正五位に敍せられた。天延二年九月に卒した。中古三十六歌仙の一人である。

〔字解〕 君が爲め 君が爲ならばの意 憐しからざりし命さへ 惜しく思はざりし命までをの意。さへは一つある上には添はる助辭である ながくもかなご 長くもあれかしこの意。がなは例の感嘆詞である。

〔全意〕 まだ君を相見ぬさきは、君が爲なら百年の命も惜しくはないと思つたものを、逢つてからの今は末の契長かれど思ふつけ、我命も長くあれかしこ思ふやうになつたわいの意、

かくごだにえやはいふきのさしも草

さしもしらじなもゆるおもひを

藤原實方朝臣

〔傳記〕 實方朝臣は家時の子であつたが「大納言左大將濟時卿の養子となつた。一條天皇に仕へて、從四位上左近衛中將にすゝんだ、歌道には頗る熱心であつた、或る時自作の歌の事から、藤原の行成と殿上で口論を始めた。實方怒つて行成の冠をうつたと云ふ痛快男兒である。天皇この由を聞き召れ、早速中將を罷め「汝歌枕をみてまゐれ」とて陸奥守に貶せられた。長徳四年に東のはで、卒した。中古三十六歌仙の一人である。

〔字解〕 かくごだに カク～ とでさへもの意。だには軽きを擧げて重きを言外に思はしむる助辭である。にやはいふきの ねやはいふと、云ふのを山の名の伊吹に云ひかけたのである。即心に思ふ事を口にいふ事か、よういはれねばの意、伊吹山は近江にも下野にもある、山としては江州の伊吹の方が著名であるが、この場合下野の方である、さしも草 艾の事である。次ぎのさしもに重ねて云ふたのである さしも さうごとの意 しらじな 我が思ふ人は知るまいなあの意。もゆる思ひを もゆるやうな思ひをまあの意、餘情をこめたのである。

〔全意〕 セめて加様々々であるごさへいへばよけれど、よういはれぬから、唯胸の中で艾のものゆるが如くに思ひこがれて居る、我がこひ人はかうとは知るまいなあの意。

明けぬればくるゝものごは知り乍ら

なほうらめしき朝ぼらけかな

藤原道信朝臣

〔傳記〕 道信朝臣は法住寺太政大臣爲光公の子である。栗田關白道兼の養子となつた。正暦二年左近

中將となり、同五年從四位上に敍せられた、同年に卒した。年二十三、中古三十六歌仙の一人である。

〔字解〕 明けぬれば 夜が明くればの意 暮るゝ物とは日が暮るゝ物とはの意。知りながら知つて居ながらもの意。ながらは接尾語 なは やはりご云ふ意 朝ぼらけ哉 夜明け方ちやなあの意

〔全意〕 夜が明ければ日が暮れる。日が暮れればまた逢ひ見らるゝ事は知つて居ながらも、今朝の別れがつらくて恨めしう思はるゝ夜明け方かなあの意

歎きつゝひごりぬる夜の明くるまは

いかに久しきものごかはしる

右大將道綱母

〔傳記〕 道綱の母は藤原兼家の室で、正四位下藤原倫安の女である。蜻蛉日記は其筆である。歌は當時の名人である。中古三十六歌仙の一人である。

〔字解〕 歎きつゝ歎息しながらの意。ひごりぬる夜の 獨りで寝る夜の意。明るまは 夜の明くるまに戸を開く意味をかけたのである。いかに久しきものごかはしる ぞれ程久しきものと思ひたまふかの意。かは勿論疑の助辭である。

〔全意〕 君の御出でのない夜を歎息しながら、獨りで寝まする夜の明くるまは、ぞれ程久しきものぞ思ひなさるかと云ふ意。即男(兼家)の通ふてこぬをうらんで詠んだ歌である。わすれじの行末まではかたければ

今日を限りの命ごもがな

儀 同 三 司 母

〔傳記〕儀同三司の母は従二位高階成忠の女である。文事に頗る通達し男子をも壓倒した。中關白道隆公の室で伊周公を生んだ。伊周は寛弘五年大臣に准せられたからして、儀同三司と號した。依つて儀同三司（三公に同じき待遇をうく）の母と云ふ。

〔字解〕忘れじの忘れまいとの契りと云ふ意。こののじは未來にかけて打消す助動詞である。行末まで自分の身の終りゆく即一生の終り迄はの意。かたければ、續くことは出來ぬからの意。今日を限りの命ともがな。今日を最後として死にたいものちやなあの意。

〔全意〕「いつまでも汝を忘れまい」とは仰せらるゝが、これからさき永く一人の仲は續かぬかもしけぬ。終りに見捨てられるよりは、むしろ今日を限りとして死んだ方がまだわいの意。

たきの音は絶えて久しく成りぬれど

名こそ流れてなほきこえけれ

大納言公任

〔傳記〕公任は關白藤原賴忠の長子である。人となり聰敏であつて博く衆藝に秀で、和歌は其得意とするところである、正二位大納言に至り、長久二年正月、歳七十六で薨じた。世人四條大納言と呼ぶ。和漢朗詠集は公任の撰である。三十六歌仙の撰者で、中古三十六歌仙の一人である。

〔字解〕たきの音は、瀧の水の落つる音はの意。絶えて久しくなりぬれど、絶えて久しくなつたけれどの意。名こそ流れ、瀧の名は世間に傳はつての意。なほきこにけれ、やはり名高いものである。此歌は拾遺集雜部にあるが、「大覺寺に人々數多まかりけるに古き瀧をみて詠み侍りける」と書いてある。

〔全意〕瀧の水の落ちる音はうち絶えて久しくなつたけれど、有名な瀧であるから、其名は世間に傳はつて今でもやはり名高いものぢやわいの意。

あらざらんこの世の外の思ひ出に

今ひご度びの逢ふこゝもがな

和泉式部

〔傳記〕和泉式部は大江雅致の女（或は權中納言懷平の女とも云ふ）である。初め和泉守橋道貞に嫁して小式部を生んだ。其詞藻才智は衆にこねてゐたが、素行は甚だ修まらなんだ。道貞さねにしを結んだ時、爲尊親王に通じてゐた。親王の薨せらるゝや、其弟帥宮に通じた、道貞の沒後上東門院に仕へた。後再び藤原昌に嫁した。素行の點については感服出来ぬが、詞藻才智のゆたかであつた點は感心する。徳川時代に謠ひ初めの式の時に謠つた東北は東北院の名木について、和泉式部の昔を語ることつくつたのである。

〔字解〕あらざらんあらずあらんの約つたもので即此の世に居なくならふの意。この世の外の死んだ後の世の中の意。思ひ出に思ひ出し草にの意。今ひご度びの逢ふこゝも哉。もう一度汝をみたいものぢやがなあの意。

〔全意〕病ひが重くなつて死なうとする今、死ぬ後の世の思ひ出に、戀しき君にもう一度あひたいものぢやなあの意。

めぐり逢ひて見しやそれともわかぬまに

雲かくれにし夜半の月かな

紫式部

〔傳記〕式部の父は藤原爲時である。幼にして聰敏叡悟、兄の史記を讀むを聞いて暗誦したといはれる。藤原宣孝に嫁した、淫靡極まる當時にあつても、式部は醜聲をもたらなかつた。宣孝の沒後上東門院に仕へた。源氏物語五十四帖を書いた。嘗て一條天皇是を見給ひて「是れ日本紀を讀みたるものなり」と稱賛なされた。世人呼んで日本紀の局と云ふた。式部は古來女流文學家中第一位を占めるの人である。源氏物語の後世の文學にあたいた影響は頗る大である。中古三十六歌仙の一人で

ある。此歌は新古今集雜部に「早くより童友たちに侍りける人の、年頃へて、ゆき逢ひたるに、勞
聳にて、七月十日頃月にきはひて、歸り侍りければ」とある。

〔字解〕 めぐり逢ひて 昔の友達に出逢つての意、見しやそれともわからぬまに 昔みたは其人か如

何かわからぬうちに 雲かくれにし 月が雲にかくれることを人が見なくなつたにかけたのであ
る 夜半の月かな 憎しき夜の月であるわい

〔全意〕 月が再び空でめぐりあつて、嘗てみた十日の影がそれかどもわからぬうちに、早、雲かくれ
してしまふたわいの意。即舊友に逢つたが其人が昔なじみの人が如何かよく思ひわけぬうちに、そ
の人の姿がみになくなつたわいの意。

ありま山ゐなのさゝ原風ふけば

いでそよ人を忘れやはする

大貳三位

〔傳記〕 大貳三位は藤原宣孝の女である。母は紫式部である、太宰大貳高階成章の妻となつた。一條天皇の乳母となり、三位に絞せられた、此歌は中々面白い歌だ。地圖でみると、有馬山と猪名野とは大いに隔たつて居る。猪名野を有馬山の麓のやうに詠んだのは理論上感心出しぬかも知れぬ。然し文學は智學とは違ふ。理くつをつけは無理だ。

〔字解〕 ありま山 摂津國有馬郡にある。ゐなのさゝはら 猪名野は攝津國河邊郡にある。小竹が多いから、さゝはらと云ふ。ほこゝぎすの鳴くを以て有名である袖中草分衣にもかいてある。風ふけば 風が吹けばの意、いでそよ いやもうそれよの意 大を忘れやはする 君を忘れるものか忘れはせぬの意。やは反語である

〔全意〕 君は覺束ないと仰せられるけれど、どうして私は契りし君を忘らるゝものが忘れはせぬ、却つて君こそ心もどないことであるの意、

やすらはでねなましものをさよふけて
かたぶくまでの月をみし哉

赤染衛門

〔傳記〕 右衛門は赤染時用の娘である。(平兼盛の子であるとも云ふ)當時の名儒大江匡衡に嫁した
が其以前に幾人かの情人があつた、匡衡に嫁する前、其従弟爲基など、も情交のあつたやうに云は
れる。匡衡に嫁する前、道長の妻倫子に仕へた、嘗て子譽周が病氣危篤なりし時、右衛門は住吉の
明神に祈つた。右衛門の熱誠こめた歌を、神が納受なされたか、譽周の病ひは全快したといはれ
る。夫匡衡を助けた功は頗る大である。中古三十六歌仙の一人である。和泉式部、紫式部、伊勢太
輔、馬内侍と共に、梨壺の五歌仙と云はれる。

〔字解〕 やすらはで やすらはすしての約言、寝なましものを ねたであらふものを さよふけて
夜更けての意、さは發語で別に意味はない。かたぶくまでの月をみし哉 西の方へ入るまでの月を見
見て居たわいの意。つまり「長く起きてゐた」と云ふ意味を、文學的に云ふた迄である。

〔全意〕 君が來ぬご知つたら、猶豫せずに寢たであらふものを、今かゝるゝ夜のふけるまで待ち受け
て、西の方へ傾く月をも眺めたわいの意、

大江山いく野の道のごほければ

まだふみもみず天の橋立

小式部内侍

〔傳記〕 内侍は和泉守橋道貞の女で、母は和泉式部である。幼より歌は巧みである。或る時、式部の
保昌に従つて丹後へゆきし時、禁中に歌合があつた。中納言の定頼、小式部の才を試みやうと思
ひ、いろいろ尋ねられしかば、小式部取あいす詠んだのがこの歌である、これから才名大いにあら
はれた。殘念なる哉早世した。

〔字解〕 大江山 丹後國與謝郡に在る。酒呑童子の故事を以て著名である。謡曲にも「大江山」と云

ふのがある。いく野の道のごほければ 生野を行くの意にかけたのである。行く道の遠ければの意。まだふみもみす まだ文もみすを、天の橋立を踏みもみすにかけたのである。天の橋立 丹後國與謝郡に在る。安藝の宮島、陸前の松島と共に日本三景と稱せらる。

〔全意〕 母の下つて居る丹後の國は、大江山や生野などを通らねば行かれぬ、遠方であるから、まだ母からの頼りはない。母から手紙はまゐりませぬの意。

いにしへの奈良の都の八重櫻

けふ九重ににほひぬる哉

伊勢大輔

〔傳記〕 伊勢大輔は、神祇伯大中臣輔親の女である。その初めて上東門院に仕へし際、奈良より櫻花を獻するに會ふた。太輔衆人環視の中に、筆紙を乞ふて書いたのがこの歌である。これより才名大いにあらはれた。後筑前守高階成順の妻となつた。中古三十六歌仙の一人である。

〔字解〕 いにしへの 住にし方の意即昔の 云ふ意である。奈良の都の八重櫻 奈良の都で咲きし八重櫻の意。奈良は誰れも知る如く、元明帝以來七代の帝都であつた、今日九重に 今日禁裏での意、今日此處に 云ひかけたのである。にはひ 色聲、香、等凡て優にやさしき趣の顯るゝことを云ふのである。

〔全意〕 昔の奈良の都で咲き出でた八重櫻が、二度時を経て今日九重の天子の御前に、もてはやされてもいはぬ美しい花の色をあらはしたわいの意、夜をこめて鳥のそらねははかるこも

よにあふさかの闌はゆるさじ

清少納言

〔傳記〕 清少納言は肥後守清原元輔の女で、頗る才のある人であつた、一條帝の皇后藤原定子に仕へて大いに眷遇を受けた。當時皇后、中宮と並立して権力を争ふに際し清少納言は皇后定子方であつて、

〔字解〕 夜をこめて 夜明けに先ちての意、鳥のそらねは 鶏の鳴き声をばの意、そらは虚事など云ふ、虚と同じである、はかるとも だますごもの意、よに 決して 云ふ意、あふさかの闌近江國にありし關所である、この歌は、支那の孟晉君の故事をひいたのである ゆるさじ 許すまゝの意。

〔全意〕 深夜にまだ鶏の鳴きもせぬに、鶏のそらねで函谷關の關守は歎かれ通すごも、君ご我ご逢ふご云ふ逢坂の關では、さやうの偽りでは決して通しは致すまいの意、いまは唯思ひ絶えなんごばかりを

人づてならでいふよしも哉

左京大夫道雅

〔傳記〕 道雅は藤原伊周の子である。長和五年從三位左中將、萬壽三年四月右京權太夫に遷り、寛德二年十月左京太夫に至つた。天喜三年七月に薨じた。中古三十六歌仙の一人である。

〔字解〕 いまはたゞ今はもうの意、思ひ絶えなんごばかりを 思ひきつてしまはうと云ふ一言だけをの意、人づてならで 人づたへならずしての略言である。即傳言でなくての意 言ふよしも哉戀ひ人に言ひよるすべもあればよいがなあの意、

〔全意〕 いろいろ言ひたいことは山々であるが、人の許さぬことで逢ひがたくあるから、今はもう一向に思ひきつてしまはうと云ふ一言だけを、逢ふて云ふ寄るべもあればよいがなあの意、あさぼらけ宇治の川霧たえぐに

あらはれ渡る瀬々のあじろぎ

權中納言定頼

〔傳記〕 定頼は藤原公任の子である。長元年中權中納言に任せられた。長久三年に勅を奉じて宮殿の

榜を書した。其功に依り正二位に敍せられた。歌を善くしたのみならず。書に巧みであつた、中古三十六歌仙の一人である。

〔字解〕 あさばらけ 夜明けの事である。宇治の川霧、宇治川は山城國宇治郡にある。著名な川である。宇治川に立ちし義がの意、たねぐに ござれくに 漱々のあじろぎ 漱々は水の浅き所を云ふ。漱々はその漱もこの漱もと云ふ意、あじろ木は川の漱に數多竹木を編んで列ねておき、網にかへて魚る捕るものである「伊勢武者は皆耕おどしの鐘きて宇治の網代にかゝりぬるかな」と云ふ歌がある、平家物語にも、謡曲類政にもひいてある歌だ。

〔全意〕 夜明けに宇治川を見渡すと、立ち渡つて川霧のござれくに消ゆて、漱々にたてゝある網代木のそここにあらはれた景は誠に宜しいわいの意。

恨みわびほさぬ袖だにあるものを

こひに朽ちなん名こそおしけれ

相

模

〔傳記〕 相模は源頼光の女である。大江公資の妻となつた。公資は相模守となつた。故に相模と號した。本名を乙侍従といひ、祐子内親王家の女房であつた。中古三十六歌仙の一人である。

〔字解〕 恨みわび わびは思ひ惱むことを云ふのである即戀人を恨みわづらひてある。ほさぬ袖だに涙の乾かぬ袖さへ。あるものをあつて辛いものをまあの意 こひに朽ちなん 戀故に朽ちてしまふの意 名こそ惜しけれ 我が名こそ惜しいわいの意

〔全意〕 我れにつれなき戀人を恨みなやんで涙の乾くひまさへない程つらいのに、其上戀の爲めに世間にうはさが立つて朽ちてしまはう、我が名は惜しいことよの意、諸ごもにあはれごおもへやまさくら

はなよりほかにしる人もなし

前大僧正行尊

〔傳記〕 行尊は參議源基平の子である。幼少の頃出家して、園城寺に入り、好んで諸所を遍曆した。保安四年延暦寺の座主に補せられ、天治二年に大僧正となつた。平等院僧正と號した。書に巧みであつた、わけて人麿をうつすに妙を得てゐた。長承四年二月天壽を全うして死んだ、時に年七十九、

〔字解〕 諸共に 相互ひにの意、あはれごおもへ あはれなりご思への意。あはれはこの場合不憫と云ふが宜しい、やま櫻 山櫻よと呼びかけたのである、此歌は大峯でおもひかけず山櫻の花の咲いたのを見て詠んだのである、山櫻は山に自生して、單瓣白色で早くさく櫻の稱である。しる人もし 知り合ひの人もないにの意

〔全意〕 山櫻よ、我は汝をなつかしく思ふにより、汝も我れを不憫ぢやなつかしい人よご思つてくれよ。この山奥には花よりはかに知る人もない身ぢやから之意

春の夜の夢ばかりなる手まくらに

かひなくたゞむ名こそおしけれ

周 防 内 侍

〔傳記〕 内侍は周防守平維仲の女である。後冷泉院に仕へ奉つた。此歌は千載集雜部にある。二月ばかり月の明き夜、二條院にて人々數多居明して、物語り侍りけるに、内侍周防倚伏して、枕もがなご忍びやかに云ふをきゝて、大納言忠家これを枕にさて肘を簾の下よりさし入れて侍りければよめる」とある。

〔字解〕 春の夜の 春の短き夜の意 夢ばかりなる 夢程なるの意、即ちよつこの間の意 かひなく立たむ 何の詮もなしに立たうの意、かひを肘にかけたのである。名こそおしけれ 浮き名こそ惜しいことであるわいの意

〔全意〕 短い春の夜の夢程のちよつこの間に、男の手枕をしたばかりに、立たう浮き名は惜しいこと

であるわいの意

心にもあらで浮き世にながらへば

こひしかるべき夜半の月かな

二一 條院

〔傳記〕 第六十七代の帝である。御父は冷泉帝御母は、藤原超子である。天皇即位後道長の權をおさへやうご金てられたが失敗した。寛元元年五月五日に崩せられた時に御年四十二。山城國葛野郡北山陵に葬つた。

〔字解〕 心にもあらで 我が思ふ心にもあらずしての意 うき世、世の中のつらきことに云ふ、卽世の中のことである、道長の爲めに御位をゆづらるゝ帝からみたら實際憂き世とみにたであらふながらへば 生きながらへて居るならばの意 こひしかるべき 懸しくありさうな意 夜半の月哉 美しうすみわかつた今夜の月かなあの意夜半は夜間の轉じたもので夜ると云ふ意である。

〔全譜〕 自分の心ならず不平満々でこのつらいうき世にながらへて居やうならば、定めてこひしく思ふであらふ。禁中の今夜のやうな月をの意、

あらし吹く三室の山のもみぢばは

龍田の川のにしきなりけり

能因 法師

〔傳記〕 能因は俗名を永愬^{ナガシ}と云ひ、橘元愬の子である。歌は其の得意とする所である。初め文章生に補せられたが、後薦髮して攝津の古曾部に隠れた。玄々集、歌枕、八十島記などを著した、中古三十六歌仙の一人である。

〔字解〕 あらしふく 嵐が吹きちらすの意。三室山 大和國平群郡龍田川の西岸神南村の背後にあら、古歌に多くよまれて居る。別名を神南備山とも云ふ、たつた川 三室山と同じく平群郡にある紅葉の名所である。能にも初番物に龍田と云ふのがある。錦なりけり 錦であるわいの意、

〔全譜〕 嵐が吹きちらす三室山の紅葉は、流れ来る龍田川での錦であるわいの意。紅葉の川水に流れる實景を面白く云ふたゞけである。
寂しさに宿を立ち出でゝながむれば

いづこもおなじ秋の夕ぐれ

良 邊 法 師

〔傳記〕 良邊は山城國愛宕郡大原に閑居してゐた。能因と同時代の歌人である。此歌は頗る趣きがある。心情を吐露し、實景を巧みに模寫した所に味ひがある。大原山中に獨居せる弱法師が、草木黄落すと云ふ秋の夕暮れに、ひとり淋しう當りをみて、感慨にうたれたる光景が思ひ浮ぶ。兎に角く名歌である。

〔字解〕 寂しさに さびしいによりての意 宿を立ち出でゝ 我が宿を立ち出でゝの意 ながむれば 物思ひをしながら眺めるご いづこもおなじ 何所もかはらぬの意 秋の夕ぐれ 秋の夕ぐれの淋しさはの意。

〔全譜〕 徒りに物淋しいから、自分の宿を立ち出で、餘所はかくも淋しくはあるまいと、眺めてみれば秋の夕暮れのかなしさ、淋しさはどこも同じやわいの意。
ゆふされは門田の稻葉おこづれて

あしのまろ屋に秋風ぞ吹く

大納言 經信

〔傳記〕 經信は權中納言源道方卿の子である。唯に和歌のみならず、書畫、音樂に通じてゐた。藤原公任と並び稱せらるゝ人である、寛治五年に大納言となつた。嘉保元年に太宰の權帥となり、太宰府で薨じた。此歌は金葉集秋の部に「師賢朝臣の梅津の山里に、人々まかりて、田家の秋風といふ事をよめる」である。

〔字解〕 ゆふされば 夕方になればの意 門田 門前の田である。おどづれて 見舞うての意 あし

のまろ屋 蘆なごで唯一寸葺いてつくつた家である。田舎なごで屋根を四方から一樣に葺いてゆき、頂上ではあせるごとの形が丸くみる、それをまろ屋と云ふのである。

〔全意〕 田舎では夕方になると、門前の稻葉の上をそよ／＼と風が吹いて蘆葺の小家に涼風がおどづれるわいご、實景を云ふたのである。

おこにきくたかしの濱のあだ波は

かけしや袖のぬれもこそすれ

祐子内親王家紀伊

〔傳記〕 紀伊は平經方の女で、紀伊守重經の妹である。後朱雀天皇の皇女、祐子内親王に仕へてゐた。此歌は中納言俊忠が「人しぬ思ひありそのうら風に波のよることいはまほしけれ」と詠んで贈つた返歌である。

〔字解〕 おこにきく 世間の評判に聞くの意 たか師の濱 和泉國大鳥郡高石村邊の海岸を云ふ あだ波は 動きて定らぬ波はの意人の心の動いて變りやすいのに云ふのである。かけしや 波をかけまいよの意 袖のぬれもこそすれ 波をかけたなら袖もぬれましやうの意 即契を結べば涙のために袖もぬれませうの意を含む。

〔全意〕 世間に評判の高い心の變り易い人とは、契を結ぶまいよ、もし契を結んだなら、棄てられて涙に袖のぬれもしやうと思へばの意、

高砂の尾の上の櫻咲きにけり

外山の霞たゞもあらなむ

前中納言匡房

〔傳記〕 匡房は信濃權守大江成衡の子である。博學多才の人であつた。特に朝典に通じてゐた。後三条天皇が東宮の時、匡房は學士となつて、啓沃した、帝即位の後權中納言となり、正二位にすゝんだ、天永二年十一月七十一で薨じた、江家次第二十一、卷を著した。

〔字解〕 高砂の尾の上のさくら 共に播磨國加古郡に在る、名高い名所であるから、其に相連ねて用ゐた。つひに世のつねの山の尾の上にかけて用ゐるに至つた。咲きにけり 咲いたわいの意 外山奥山に對して端なる山を云ふのである。立たずもあらなむ 立たずすればよいの意
〔全意〕 遙か向ひの山の峯に、美しう櫻の花が咲いたわい。前山に霞が立たぬよいなあ、彼の花がみえるやうになるからの意

うかりける人を初瀬の山おろし

はげしかれごは祈らぬものを

源俊頼朝臣

〔傳記〕 俊頼は大納言經信の子である。堀河、鳥羽、崇徳の三帝に仕へ頗る名を著した、天治の初めつかた、勅を奉じし金葉和歌集を撰むた、散木葉歌集山水髓脣無名抄を著した、此歌は千載集戀部に權中納言俊忠の家に戀の十首の歌よみ侍りける時、祈不透戀ごへる心を」とある。

〔字解〕 うかりける 憂くつれなかつた人の意である、はつ瀬の山おろし 泊瀬山は大和國式上郡に在る山上に有名な泊瀬の觀音がある。山おろしは山上から吹きくるはげしい風を云ふのである。
〔全意〕 泊瀬の觀音さまよ。初めからわれにつれない人をいよ／＼つれない人になれごは、祈りはせぬものをまあ、何故に一層つれなくはせしぞ、わけのわからぬ事であるわいの意
ちきり置きしさせもが露を命にて

あはれこそしの秋もいぬめり

藤原基俊

〔傳記〕 基俊は右大臣俊家の子である。和歌は其得意とする所である、萬葉集に通じてゐた。俊頼と共に萬葉通と呼ばれる。從五位下左衛門佐となつた。保延四年薙髪して覺舜と號した。悦目抄、新十六歌仙、新撰朗詠集等を著した。

〔字解〕 ちぎり置きし 御約束申しておいたの意。させもが露を命にて。させもはさせもぐさの略で、させもぐさはさしもぐさの轉である。つまりは露はかない恵の意。あはれ 感嘆詞である。を意味す。

ことしの秋もいぬめり、今年の秋もくれてゆくやうである。の意。

〔全意〕 賴みにせよと仰せられた、はかない恵みの言葉を我が一命の如くに頼りとして居るに、あ、

今年も維摩會の講師に請せられずして御沙汰もあるべき秋も暮れてゆく様子であるわいの意。

〔備考〕 此歌は千載集懸部に「僧都光覺、維摩會の講師の請を、たび／＼もれにければ、前の太政大臣に恨み申しけるをしめじが原」と侍りけれど、其年もまた洩れにければ遣しける」

ごある、即基俊が子息光覺を維摩會の講師にせんとて詠んだのである。

わだの原漕ぎ出でゝ見れば久方の

雲井にまがふ沖津白浪

法性寺入道前關白太政大臣

〔傳記〕 忠通は關白藤原忠實の長子で、頼長の兄である、安和二年年二十五で關白となり、崇徳、近衛の兩朝に攝政關白となつた、後白河帝の時又關白となつた。別業を法性寺の側につくつた。世人法性寺關白と呼んだ、法性寺關白記は其日録である。書は一家をなした。法性寺様と稱する。長寛二年に年六十八で薨じた。

〔字解〕 わだの原海上のことである、漕ぎ出でゝ見れば、船を漕ぎ出して眺むればの意。久方、久方は、天の枕詞である。雲居、雲のある所即空のことである、まがふ、混ふで紛れて區別のつかぬを云ふのである。沖津白浪、沖の白浪と同じである。

〔全意〕 海上に船を漕ぎ出して、遙に眺めるごと、空と沖と浪とが連なりあつて、それが浪か、空か區別がつかぬ、あゝ廣い哉の意。

瀬を早み岩にせかるゝたき川の

われても末にあはんごぞ思ふ

崇德院

〔傳記〕 第七十五代の帝で、御名を顯仁と申し奉る。御父は鳥羽帝、母は藤原璋子である、保安四年五歳で即位なされた。然るに永治三年十二月鳥羽法皇は強めて位を近衛帝に譲らしめた。天皇頗る不平である、後白河天皇の位につくや遂に保元の亂をおこされた。然し天皇の軍利あらずして天皇は讃岐國志度へ流された、長寛二年八月、御年四十六で崩じた。讃岐國阿野郡白峯に葬つた。

〔字解〕 瀬を早み、瀬が早さにの意。瀬は即ち川の淺い所を云ふ、をは感嘆の意味をあらはす詞である。岩にせかるゝ瀧川の、岩にせきどめられる瀧川の如くにの意。われても、別れて居るを、水のせかれてわるゝにかけて云ふたのである。

〔全意〕 瀬が早さに、岩にせかるゝ瀧川の水の如くに、今は人目にせかれて、逢へすごも、末々には其水が一所に合ふ様に二人仲よくらさうの意。

あはぢ島通ふ千鳥の鳴く聲は

いく夜ねざめぬすまの關守

源兼昌

〔傳記〕 兼昌は美濃守俊輔の子である、從五位下皇后宮大進となつた。天永三年に卒した。此歌は金葉集冬部に「關路の千鳥といへる事をよめる」とある。

〔字解〕 あはぢ島、淡路の國のことである。須磨浦と相對してゐる距離はごく近い。通ふ千鳥の鳴く声に飛び行く千鳥の鳴き聲のあはれるなるにの意。千鳥は水禽の名である。冬月多く河海の上に群つて鳴く。鳴、鶴鶴に似てそれよりは少し小さい鳥である。歌には多く詠まれて居る。いく夜ねざめぬ、幾晩もめをさましたの意。すまの關守、須磨の關守はの意。須磨浦は攝津國八部郡にある。東西須磨村の海岸を云ふのである。西南に近く淡路島をみ、風景絶可の地である。「文學地理」上著名なる地である。

〔全意〕 冬の夜のさびしさに、須磨の浦から淡路島へもの哀れに鳴いて通ふ千鳥の聲に、幾晩もく、須磨の關守はめをさましたわいの意。

あき風にたなびく雲のたえ間より

もれ出る月の影のさやけさ

左京大夫顯輔

〔傳記〕 顯輔は正三位修理大夫顯季の季子である。堀河、鳥羽、崇徳、近衛の四朝に仕へて正三位、左京大夫皇后宮亮に至つた。歌は其得意とする所である。崇徳天皇の勅を奉じて詞花集を撰じた。

〔字解〕 あき風にたなびく雲の 秋風の爲めにたなびく雲の意、たなびくは靡くを、たの發語で強めたのである。たえまより 中絶えた所からの意 もえ出る月の 漏れて出る月の意 影のさやけさ光の明けきことよの意

〔全意〕 秋風に吹かれて棚引く雲の絶え間から、ぬつと漏れて出る月の光りのさやけきことよ、の意 秋月をめで賞した歌である。

ながからむこゝろもしらず黒髪の

みだれてけさは物をこそおもへ

待賢門院堀川

〔傳記〕 堀川は神祇伯顯仲の女で、待賢門院に仕へた、待賢門院は閑院大納言公實卿の女で、鳥羽帝の后宮である。此歌は千載集戀部に「百首の歌奉りける時戀の心をよめる」とある。

〔字解〕 ながからむ 君ご我との契りの長くあらむの意で、黒髪のみだれて 黒髪かみだれての意 物をこそおもへ 繰りするかせぬかの心もわからずの意、黒髪のみだれて 黒髪かみだれての意 物をこそおもへ 心物思をするわあの意。こそは此場合感動の意味を強くする。

〔全意〕 よべ始めて契を結んで、行末長く交らふとは云ひかはしたけれど、未長き心の程も知り難いから心がさまよに亂れて、限りない物思ひをするわいの意、

ほこゝぎす鳴きつる方を眺むれば

たゞありあけの月ぞのこれる

後徳大寺左大臣

〔傳記〕 實定は右大臣藤原公能の子である。文治五年七月左大臣となつた。建久二年六月薙髪して知圓と號したが、まもなく薨じた。時に年五十三。和歌を頗る好み、常に歌人を集めて嘯咏して樂しんだと云ふ。祖父實能も左大臣であつた。この故に後徳大寺左大臣と云ふた。此歌は曉に時鳥と云へる心を詠んだものだが、よく自然をあらはし得て面白い。

〔字解〕 ほこゝぎす 常に山中に棲み(平野でもなくが)夏の始めから秋の終りまでも夜晝の區別なく鳴く。容易く姿をみせぬ。されば狂句にも「時鳥姿はみえぬ屁のやうちや」とある。稻荷山、生駒山、深井山角田川などは古來ほこゝぎすの名所である。別名を四手の田長、霍公、郭公、杜鵑、子規、杜宇と云ふ 鳴きつる 鳴いたばかりの、眺むれば 見やればの意。

〔全意〕 夏の曉にはほこゝぎすの鳴いた方を見るに、時鳥の影も形も見えぬ。たゞ有明の月ばかりが空に残つてみえるの意

おもひわびさても命はあるものを

憂きに堪へぬはなみだなりけり

道因法師

〔傳記〕 道因法師は本名を敦頼と云ふ。藤原清孝の子である、崇徳帝に仕へて從五位上左馬助となり。尋て馬寮使となつたが、まもなく薙髪して道因と號した。歌に對する熱心は敬服するにあまりある、年八十の時も尙毎月徒步で住吉明神に詣うて「秀歌を得させ給へ」と祈つた。

〔字解〕 おもひわび 思ひわづらひての意 さても それでもの意 命はあるものを 死なずにあるものをまあの意 憂きにたへぬは つらいに耐へられぬものはの意 なみだなりけり 涙であるわいの意

〔全意〕 このやうにつれない人を思ひ煩つても、それでも命は死なず悚へてあるものをまあ、つらいに耐えられぬは、唯涙であるわいの意。

世の中よ道こそなけれ思ひいる

やまの奥にも鹿ぞなくなる

皇太后宮大夫俊成

〔傳記〕 俊成は權中納言俊忠の子である。初め顯廣と稱した。歌を基俊に學んだ、後鳥羽帝に仕へて、皇太后宮大夫正三位に至つた。世人五條の三位と呼ぶ。安元二年に出家して釋阿と號した。後白河帝の勅を奉じて、千載集を撰じた。元久元年に年九十一で薨じた。古來風體抄を著した。家集には長秋詠艸がある。

〔字解〕 世の中よ世の中はよの意、よは唯感嘆詞である。道こそなけれすべきやうなしと云ふ意思ひいる深く思ひこむことである。鹿ぞなくなる鹿が悲しう鳴くわいの意

〔全意〕 あはれる哉、世の中よ、世の中のことは仕方がない。人の居らぬ奥山はと思ひ込んできてみれば、その山の奥にも鹿が悲しう鳴くわい、あゝ世の中はどこもわびしいわいの意

ながらへば又この頃やしのはれん

憂しみ見し世ぞ今はこひしき

藤原清輔朝臣

〔傳記〕 清輔は左京大夫顯輔の子である。正四位下皇太后宮大進兼、長門守に至つた。幼より歌學に志し、俊成、僧西行らと並び稱せられて居る。二條天皇の勅を奉じて、續詞花集を撰じた。殘念なる哉。書成り、奉覽を經ぬうちに、帝は崩せられた。終ひに勅撰集には列せられなかつた。治承元年に卒した。奥義抄、初學抄、袋艸子等を著した。

〔字解〕 ならがらへば此世に長らへて居ればの意、又この頃やこの今の時節が又の意、しのはれん 慕はしく思はれうの意、うしあ見し世ぞういつらいと思つた昔の時節が今はこひしき今

は戀しく思ふの意

〔全意〕 生きながらへて、此世の中に居らば、この今の憂き時が慕はしく思はれる時があらふ、憂いつらいと思つた昔の事が、今はこひしく思はれるにつけてもの意、

よもすがら物思ふ頃は明けやらで

闇のひまさへつれなかりけり

俊 惠 法 師

〔傳記〕 俊惠は源俊賴の子である。其家を歌林苑と號し、毎月和歌の會を催うしたと云はれる、此歌は千載集雜部に「戀の歌さてよめる」とある。最後のつれなかりけりの一句が中々面白い。

〔字解〕 よもすがら夜通しの意、物思ふ頃は物思ひをする頃はの意、明けやらで夜が明けやらすしての意、闇のひまさへ寝屋の板戸の隙間までがの意、闇は夜寝る室を云ふつれなかりけりつれなくあるわいの意

〔全意〕 夜通しつれない人のために、種々物思ひをする頃には、早く夜が明けよかしと思ふ。だが、夜がなか／＼明けないで闇の隙間までがつれないわいの意、なげゝごて月やは物を思はする

かこち顔なる我が涙哉

西 行 法 師

〔傳記〕 西行は本名を、佐藤義清と云ふ。左衛門尉康清の子である。鳥羽上皇に仕へて、北面の武士となつたが、二十三歳の時無情を感じ通世した。そして圓位又は西行と號した。到る處を行脚した。建久元年二月十六日に京都で寂した。時に年七十三。撰集鈔を著した、家集を山家集と云ふ。此歌は千載集戀部に「月前の戀と云へる心をよめる」とある。

〔字解〕 なげゝごて歎けと云うての意、月やは物を思はする思はするか、思はせはせぬかの意、かこち顔なるかこつけ顔なるの意、涙かな涙なるかなの意

〔全意〕 欲けゝよどいうて、月が物思ひをさするか、いやさせはせぬ、戀故に月をみて、何となく物悲しく涙の出るのを、月にかこつてなげくのぢやわいの意、

むら雨の露もまだひぬまきの葉に

きり立ちのほる秋の夕ぐれ

寂蓮法師

〔傳記〕 寂蓮は藤原定長と云ふ。僧俊海の子である。叔父俊成の養子となつた。そして左中辨中務少輔從五位上となつた。然し俊成に定家生まるゝや、自ら僧となつた。歌は頗る得意とする所である。此歌の如き油繪をみるの感がする。建仁二年七月二十日に寂した。

〔字解〕 むら雨 義雨、村雨などゝ書く、一群づゝ強く降りすぐる雨の事を云ふのである。露もまだ

ひぬ 露もまだ乾かぬの意。眞木 真はほむる語である。柏、杉類の通名である。あきの夕ぐれ

秋の夕ぐれは哀れなる哉の意。名詞止めにした所に味ひがある。

〔全意〕 さつこ一むら降りしきつた、雨の名残の露が、まだ乾かぬ深山の立木の葉に、霧が立ちのぼつて聞くなつてゆく秋の夕暮は、ここにあはれであるわいの意、

難波江の蘆のかりねのひよゆゑ

みをつくしてや戀ひわたるべき

皇嘉門院別當

〔傳記〕 別當は大皇太后宮亮俊隆の女である。皇嘉門院は崇徳帝の皇后で、藤原忠通公の女である。此歌千載集戀部に「攝政忠通公右大臣の時、家の歌合に旅宿に逢ふ戀と云へるこゝろをよめる」とある。

〔字解〕 難波江の 難波の堀江を云ふ。難波は今の大坂の地で蘆の名所である。古來歌や詩によまれて居る。「文學地理」上著名な地である。蘆のかりねのひよゆゑ かりねは蘆根に假寐をかけたのである。一寸面白く用ひた法だが要する所、一夜の旅びのなさけがの意、みをつくして、身をな

くす迄の意 戀ひ渡るべき 戀ひで月日を暮すであらふの意、

〔全意〕 難波の一夜の旅寝のなさけが、忘れがたくて命をつくす迄も、恋ひて月日を暮すであらうか
との意

玉の緒よ絶えなば絶えね長らへば

しのぶるこごのよわりもぞする

式子内親王

〔傳記〕 式子内親王は後白河帝の皇后である。御母は大納言藤原季成の女、從三位成子である。和歌に繪に巧みであった。加茂の齊院となり、三宮に准せられた。後蓬髮して法名を加法と云ひ高倉宮と稱した。諭曲定家は、定家卿と式子内親王との物語りをつくつたものである。

〔字解〕 玉の緒よ 我が命よの意。玉の緒は命のはかなきに云ふ。絶えなば絶えね 絶ゆるならば絶えよの意 長らへば 生きながらへて居らばの意。しのぶることの包みこらふることの意。よわりもぞする 心が弱りもしやうの意

〔全意〕 我が命よ、思ひの爲めに死ぬるならば、死んでもよい。此の世に生き長らへば、包みこらふる心が弱つて色に顯はれもせむの意。

見せばやな雄島の海士の袖だにも

ぬれにぞぬれし色はかはらず

殷富門院大輔

〔傳記〕 大輔は從五位上信成の女で、殷富門院に仕へた。殷富門院は、後白河院の皇后で式子内親王の姉君である。

〔字解〕 見せばやな 見せたいものぢやなあの意。ばやは希望を云ふ助辭である。雄島 陸前國松島に在る 袖だにも 袖でさへもの意、ぬれにぞ濡れし 濡れこぼしたの意。色はかはらず。色はかはらないの意。

〔全意〕 この歌は戀人のつれなきを嘆いた歌で、其意味はあの雄島の海士の濡れどはしなる袖でさへも、濡れて居る許りで色はかはらぬものを、我が袖は思ひの涙のために、濡れる許りでなく、色までも變りはてたわいの意、
きりぐす鳴くや霜夜のさむしろに

衣片敷きひこりかもねむ

後京極攝政太政大臣

〔傳記〕 藤原良經は後法性寺關白兼實の子である。建仁二年十二月に攝政となり、元久元年十二月太政大臣となつた。博く衆藝に通じ、最も和歌を得意とした。建久元年七月に薨じた。家集を月清集と云ふ。

〔字解〕 きりぎりす 虫の名である、今このほろぎでリウ〜と鳴くものである。きりぎりすここはろぎとは昔と今と反対になつて居る 鳴くや 鳴くまあの意 さむしろに さは發語である、むしろは敷物である。ころも片敷き 衣の片袖を敷くことでつまり獨り寝ることである。ひこりかもねむ ひこりで寝ることかまあの意

〔全意〕 物哀れにきりぎりすが鳴く、この霜夜の肌寒き寢床に、つれもなくて獨りねることか、あゝつらいことぢやわいの意。

わが袖は汐干に見えぬおきの石の

人こそ知らぬかわくまもなし

二條院讃岐

〔傳記〕 讃岐は源三位頼政の女である。女ではあるが、學を深く好み、十三經を通讀したと云はれる。父頼政は有名な歌人であつた。其系統をひいたものか、讃岐も中々巧みに歌を詠むだ。二條院に仕へた。

〔字解〕 汐干にみえぬ 汐干の時にもみえないの意 沖の石の 沖の石の如くにの意 人こそ知らね

は知らないがまあの意、こそは意味を強めんが爲めの語である。
〔全意〕 我か戀は深く忍んである故に、汐干にも見えぬ沖の石の如くに人は知らないけれども、袖の乾く間もなくつらいことであるわいの意、
世の中は常にもがもななぎさ漕ぐ

あまのをぶねの綱手かなしも

鎌倉右大臣

〔傳記〕 源實朝は頼朝の子で、母は北條政子である。建仁三年九月從五位下に敍し、征夷大將軍に補せられた。建保四年十二月右大臣となつた。其拜賀の式を鶴岡社で行つた。實朝參拜して段を下らんとする時、公曉の爲めに弑された。時に年二十八。

實朝は資性温雅頗る文學を好み、歌は定家に學むだ。萬葉的の雄大なる句調を含んだ、獨特の歌である。家の集を金槐集と云ふ。
〔字解〕 世の中は常にもがもな世の中は何時もかはらず生きてありたいなあの意。なぎさ漕ぐ 磯邊近くをこぐの意、渚は波打際を云ふ。あまの小舟の 海士の漁りする小舟の意 綱手かなしも綱手は船にかけて引く綱を云ふ。もは感嘆詞である。釣舟にかけて引く綱の景色の面白きを賞めたへたのである。

〔全意〕 世の中は何時も變らず生きてありたいものぢやなあ、磯近く漕く釣舟にかけて綱手をかけて引く景色が誠に面白いわい、されば長生をしてまたも來てみたいなあの意
みよし野の山のあき風さよふけて

ふるさこ寒くころも擣つなり

參議稚經

〔傳記〕 雅經は藤原頼經の子である。承久建保の間、從三位、左近衛中將であつた、承久二年十二月參議に任せられた。同三年三月に薨じた。和歌は其得意とする所である。源道具、藤原定家等と共に

人に勅を奉じて新古今和歌集を撰じた。飛鳥井家と稱し、子孫承く和歌、蹴鞠を以て世に重んせられて居る。

〔字解〕 みよし野 吉野の事である。みは美むる意を添へた發語である、さよふけて 夜が更けての意、さは發語である。ふるさと ふるく物のありたりし地を云ふのである。こゝでは吉野をさすころも揃つなり 衣にする織物をうつるのである。

〔全意〕 吉野山から吹き下す秋風が吹きすさんで、夜更くるまゝに、寒さは段々ひどくなる頃、あれにも吉野の里に衣をうつ音がきこゆるわいの意。

おふけなくうき世の民におほつかな

わが立つそまにすみぞめの袖

前大僧正慈圓

〔傳記〕 慈圓は藤原忠通の子である。和歌は其得意とする所である。性人を愛し苟も一技一藝あるものは養つて棄てなんだとの事である。建久六年十一月僧正となり、後大僧正、天台座主となつた、嘉祐元年九月に寂した、愚管抄の著者である。此歌千載集に題知らずがある。

〔字解〕 おふけなく 無負氣の意で、身の分に過ぐるを云ふのである。うき世の民 天下萬民の上にの意。うき世は人間の世をさす、おほつかな 墨染の袖を覆ふかなの意。わが立つそまに これは傳教大師の「阿帳多良三菩堤心の佛等吾が立つ袖に冥加あらせ給へ」と云ふ歌から取つたのである すみぞめの袖 法師の身と云ふ意

〔全意〕 我は比叡山に住む法師の身であるから、身の分に過ぎて、天下萬民のために安全の祈りをすることであるわい、思へば過分なる我がしわざであるなあの意、

はなさそふあらしの庭の雪ならで

ふりゆく物は我が身なりけり

入道前太政大臣

〔傳記〕 公經は内大臣藤原實宗の子である。承久の初め正二位權大納言に至り、後堀河の朝に太政大臣となつた、寛喜三年病の爲め出家して、覺勝と號した。佛堂を北山に建て西園寺と云ふた、寛元二年に年七十四で薨じた。

〔字解〕 はなさそふあらしの 花を誇ひて吹く嵐の意 庭の雪ならで 庭の花吹雪ならずしての意 ふりゆくものは 年のましゆくを、花の降りゆくに懸けたのである。即老い衰へゆく物はの意 我が身なりけり 我が身ぢやわいの意。

〔全意〕 花を誇ふ嵐の爲めに、花が庭に雪のやうに降りゆくが、ふりゆくものは唯に花のみではない。年のふりゆくは却の我が身ぢやわいの意

來ぬ人をまつほのうらの夕なきに

焼くやも鹽の身もこがれつ、

權中納言定家

〔傳記〕 定家は俊成の子である。寛喜四年に正二位權中納言に至つた。後出家して明靜と云ふた。仁

治二年八月に年八十で薨じた、世に京極中納言と云ふ。和歌の大家であるから著書も中々多い。新古今集、新勅撰集、詠歌大槻、拾遺忠艸等は頗る著名である。定家の子孫は世々和歌所の實權を握り、二條、冷泉の二流に分れて争つた。

〔字解〕 來ぬ人をまつほのうらの 来ぬ人を待つと云ふ意を松帆浦にいひかけたのである。松帆浦は淡路國三原郡に在る。夕なぎに 夕方に浪風の和ざたる時の意 焼くやも鹽の 焼くもしほの如くの意。やは間投の感嘆詞。藻しほは海藻をかき集めて、乾し、これに沙水を汲みかけ、沙のつきたるを焼いて、水にませその上澄を煮て、鹽を取るものである、身もこがれつ、我が身も焦れつゝの意即藻鹽の焦るにかけたのである、

〔全意〕 來もしない人を待つたらさは、松帆の浦の夕なぎに焼くもしほの如くに、我身も焦れく

て、甚だわびしいわいの意、

風そよぐ奈良の小川のゆうぐれは

みそぎぞ夏のしるしなりける

從一位家隆

〔傳記〕 家隆は中納言藤原光隆の子である。元久三年五月、宮内卿に任せられた。文暦二年九月從二位に敍せられた。後薙髮して佛性と號し、嘉禎三年に年八十で薨じた。和歌はそのでみどする所、定家と並び稱せられる。元久中定家と新古今集を撰じた。作る所の歌は六萬首あると云はれる。

〔字解〕

風そよぐ 風がそよぐと木の葉に吹きて音するを云ふのである。なら的小川の山城國葛

野郡に在る。つまり風が檜の木へ吹くを地名にいひかけたのである。みそぎぞ禊する事のみはの

意 禊は身に罪ある時、その罪をはらひ清めため河原に出で、身を濯ぐ儀式で六月、十二月の晦

日に行ふものである。夏のしるしなりけり 夏の證據であるわいの意、

〔全意〕 檜の葉へ風がそよぐと吹くならの小川の夕暮は、涼しくて秋かと思はれるが、唯禊するこ

とのみが夏の證據であるわいの意、

ひこもをじ人も恨めしあちきなく

世をおもふ故にもの思ふ身は

後鳥羽院

〔傳記〕 第八十二代の帝で、御名を尊成と申し、高倉帝の御子である。元暦元年に践祚し給ふた。在位十五年にして位を土御門帝にゆづられ、薙髮して良然と號し、院にあつて政事を決せられた。承久三年に北條義時と戦ひ、隱岐國に遷され、延應元年二月に崩せられ、山城國愛宕郡大原法華堂に葬つた。後鳥羽院と順徳院は和歌の達人であらせられる。このほかに名歌は澤山ある。

〔字解〕

ひこもをじ人も恨めしく思ふの意である。人も恨めし 我が儘を振舞ふ人々も恨めしく思ふ

の意即義時の如きよからぬ臣のあることをなげかれたのである。あちきなく 味氣無しの意、何事

も心にまかせぬ即面白みなくの意 世を思ふ故に 世の中を味氣なく思ふ故にの意 もの思ふ身は色々と心を碎きて物思ひをする身はの意

〔全意〕 凡て天下の事心にまかせずして、世を面白からず思ふ故に、色々と心を碎いて物思ひをする身にはすぐれた人物の惜しくも思はれ、今在る臣下を恨めしくも思はれるわい、なきない事ぢやなあの意

もゝしきやふるき軒端のしぶにも

なほあまりある昔なりけり

順徳院

〔傳記〕 第八十四代の帝で、御名を守成と申し、後鳥羽院の御子である。承久四年十一月に践祚された。後鳥羽院と共に北條義時を討たうとして事敗れ、ために佐渡ヶ島へ遷され給ふた。仁治元年九月十一日に佐渡で崩じた。時に御年、四十六、山城國愛宕郡大原陵に葬つた。和歌を得意とせられた。又禁中秘抄を撰ばれた。此歌もやはり鎌倉の暴虐を怒つてよまれたのである。金子元臣氏は此歌を評して曰く「これ及び上の後鳥羽院の御製は善惡をこかう申すべきに非す。畏し、うれたし、悲し、恨めし、憎し、あはれ」と當を得た評である。

〔字解〕 百しきや 禁裡のことである、やは呼びかけの助辭である、ふるき軒端の 大宮の荒れたることを云ふたので、裏面に帝位の衰へたことを含んで居る。しぶにも 昔を慕ふにもの意 即昔を慕ふことを忍ぶ草が生ふるまで衰へた世であるから、昔の帝室の盛んな事が思ひ慕はれる。いくら慕ふても思ひきれない。やはり慕ふに餘ある昔であるわいの意

〔全意〕 禁裏の軒端に忍ぶ草が生ふるまで衰へた世であるから、昔の帝室の盛んな事が思ひ慕はれる。いくら慕ふても思ひきれない。やはり慕ふに餘ある昔であるわいの意

百人一首 雜編

六六

歌留多は文學的の遊戯なり。室内遊戯としては、最も高尚優美のものなり。トランプあり、花合ありと雖も、カルタには及ばざるなり、商人に對しても學生に對しても、凡て職業の別なく、適切な遊びなり。然れど其過度にこれをなすべからず。一は衛生の上より、一は時間經濟の上よりするも、過度にやる事はさけるべし。唯各々業務のさわりどならぬ。範圍でなすべきなり。以下項を分ちてカルタにつき思ひ浮かびし事をかいつけん。

第一、歌留多取りの準備について

一般の人は、歌留多の名人即ち黒人となるの必要なし、普通人々に取れゝば可なり。元來カルタをする根本目的は「樂しみ」と云ふにあり。然し今日にてはこの根本目的を忘れたる人多し普通カルタを練習する人に二種あり。一は單に慰みとして一は一種の虛榮心より黒人たらんとする人、後者は今論するの必要なし、唯黒人たらんとする人は宜しく出きうる文科學的研究をなすべきなり。要するに此の如き黒人的研究は、暇人のすることなり、予は黒人的研究をわるしさは云はず、業務の妨害となるらぬ範圍にて、これをなすは喜ばし。

一般の人は先づ第一に百首歌を全部暗記すべし。例へば「うべ山風」を思ひ浮ぶるやうにすべし。次ぎには下の句の三三字にて直ちに上の句を思ひ出すやうに練習すべし。これに次いで、モーション、排列法、の研究をすべし。

次ぎにかゝぐる歌は、中々覺え難き歌なり。初心者はよく〳〵暗記すべし。隨分暗記しても實戰の場合には、狼狽するものなり、よく〳〵研究すべし。この他覺え難き歌は多し、そは各自の研究にまか

す、總べて技藝の妙術は「教ゆるものに非す自ら工夫」するものなり、カルタ又然り、上手となり得るか否やは一に諸君の研究如何にあり。

(い) 上の句のまささらしき歌

あさばらく有明の月さみるまでに
なには湯短かき蘆のふしのまも
なげゝとて月やは物を思はする
わだの原八十島かけて漕ぎ出ぬと
こゝろにもあらで浮き世に長らへば

あさばらく宇治の川霧たえゝに
なには江の蘆のかりねの一夜故
なげきつゝひどりぬる夜の明る間は
わだの原漕ぎ出でゝみれば久方の
こゝろあてにをらばやをらん初霜の
世の中よ道こそなけれ思ひいる
思ひわびさても命はあるものを
君が爲惜しからざりし命さへ

(ろ) 下の句のまささらしき歌

あはれこどしの秋もいぬめり
いまひだく度びの御幸またなん
みだれだけは物をこそおもへ
身をつくしてや懲わたるべき
わがころも手に雪はぶりつゝ
わが身よにふるながせしまに
ころもはすてふあまの香具山

左に初心者の記憶に便せん爲、百人一首を五十音順にわけてかいつけん

▲あの部(十七枚)

秋の田のかり穂の庵の苦をあらみ

朝ばらけ有明の月ごみるまでに

朝ばらけ宇治の川霧たえぐに

秋風にたな引く雲のたえ間より

あし引きの山鳥の尾のしだり尾の

天の原ふりさけみれば春日なる

天津風雲の通ひ路ふきこちよ

有明のつれなく見えしわかれより

淺茅生のをのゝしの原忍ぶれど

あひみての後の心にくらぶれば

あはれともいふべき人は思はえて

明ねればくるゝものとは知りながら

あらざらんこの世の外の思ひ出に

有馬山いなのさゝ原風ふけば

あらし吹くみむろの山の紅葉は

淡路しま通ふ千鳥の鳴く聲は

逢ふことの絶えてしなくななか／＼に

『備考』逢ふことはあふなれど初音は「お」なる故「を」の部へ入れてみるべし

▲なの部(八枚)

我が衣手は露にぬれつゝ

吉野の里にふれる白雪

あらはれわたる瀬々の網代木

もれ出る月のかけのさやけさ

ながくし夜を獨りかもねん

三笠の山に出でし月かも

乙女の姿しばしこどめん

曉ばかりうきものはなし

あまりてなごか人のこひしき

むかしば物を思はざりけり

みの徒らになりぬべきかな

なほうらめしき朝ばらけかな

今ひとたびのあふことものがな

いでそよ人を忘れやはする

龍田の川のにしきなりけり

いく夜ねざめぬすまの關守

人をも身をもうらみざらまし

▲わの部(七枚)

難波湯みじかき蘆のふしのまも

名にしおはゞ逢坂山のさねかづら

夏の夜はまだ霞ながらあけぬるを

嘆きつゝひごりぬるよの明くるまは

ながからん心も知らず黒髪の

なげゝとて月やは物を思はする

ながらへばまだこの頃や忍ばれん

△なには江の蘆のかりねの一夜ゆゑ

我庵は都のたつみしかぞすむ
わだの原漕ぎ出でゝ見れば久方の
わだの原八十島かけて漕ぎ出でぬご
わびぬれば今はたおなじなにはなる
忘れじの行末ではかたけれど
忘らるゝ身をば思はず誓ひてし
我袖は沙干にみえぬ沖の石の

▲おの部(五枚)

奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の

小倉山峯の紅葉心あらば

大江山いくのゝ道の遠ければ

音にきくたかしの濱のあだ波は

聲きく時ぞ秋はかなしき
今一度のみゆきまたなん

まだふみもみす天の橋立
かけしや袖のぬれもこそすれ

思ひわびさても命はあるものを
おほけなく浮き世の民におほふかな

『備考』逢ふことの云々の歌は、「こ」の部へ入れてみるをよしこす

▲たの部(六枚)

田子の浦に打出でゝみれば白妙の
立ち別れ稻葉の山の峯におほる
誰をかも知る人にせん高砂の
瀧の音はたえて久しうなりぬれど
玉の緒よたえなばたえねながらへば
高砂の尾の上の櫻さきにけり

▲この部(六枚)

これやこのゆくもかへるも別れては
この度はぬさも取あへす手向山
心あてに折らばや折らん初霜の
こひすてふ我が名はまだき立ちにけり
心にもあらでうき世にながらへば
こぬ人をまつほの浦の夕なぎに

▲みの部(五枚)

陸奥のしのぶもじすり誰ゆゑに
みかの原わきてながるゝ泉川
みかきもり衛士のたく火の夜は燃え

みせばやな雄島のあまの袖だにも
みよし野の山の秋風さよふけて
よの部(四枚)

世の中はつねにもがもな渚ごぐ
世の中よ道こそなけれ思ひいり
夜をこめて鳥のそらねははかる共
夜もすがら物思ふ頃はあけやらで

▲かの部(四枚)

春すぎて夏さにけらし白妙の
花の色はうつりにけりな徒らに
春の夜の夢ばかりなる手枕に
花さそふ風の庭の雪ならで

▲かの部(四枚)

かさうぎの渡せる橋におく霜の
かくごだにえやいぶきのさしもぐさ
風をいたみ岩打つ波のおのれのみ
風そよぐ奈良の小川の夕ぐれは

▲やの部(四枚)

山川に風のかけたるしがらみは
山里は冬ぞさびしさまざりける
やすらはでねなまし物を小夜更けて

うきにたえぬは涙なりけり
我立袖にすみぞめの袖

名こそ流れで猶きこえけれど

しのぶることのよわりもぞする

外山の霞たゞすもあらなん

富士の高根に雪はふりつゝ
まつこし聞かば今かへりこん
松も昔の友ならなくに

おきまどはせる白菊の花

人知れずこそ思ひそめしか

こひしかるべき夜半の月かな

やくやもしほの身もこがれつゝ

亂れそめにし我ならなくに

ひつみきさてか戀しかるらん

ひるは消えつゝ物をこそおもへ

閑のひまさへつれなかりけり

ぬれにぞぬれし色はかはらじ
ふるさこさむく衣うつなり

海士の小舟の綱でかなしも
山の奥にもしかざなくなる
世に逢坂の關はゆるさじ
閑のひまさへつれなかりけり

衣ほすてふ天の香具山

我が身世にふる眺めせしまに
かひなくたん名こそおしけれ
ふりゆくものは我身なりけり

白きをみれば夜ぞ更けにける
さしもしらじな燃ゆる思ひを
碎けて物を思ふ頃かな
みぞぞぞ夏のしるしなりけり

流れもあへぬ紅葉なりけり
人めを草も枯れぬと思へば
傾くまでの月を見しがな

八重葎しげれる宿のさびしさに

今はたゞ思ひたえなんぞばかりを
今こんといひしばかりになが月の
いにしへの奈良の都の八重櫻

▲ちの部(二枚)

契りきながたみに袖をしづりつ、
千早振る神代もきかず立田川
ちざりおきしさせもが露を命にて

▲きの部(二枚)

君が爲春の野に出て君菜つむ
君が爲をしからざりし命さへ
きりぎりすなくや霜夜のさむしろに

▲ひの部(二枚)

久方のひかりのぞけき春の日に
人はいさ心も知らず古里は
人もをし人もうらめしあむきなく

▲うの部(二枚)

うかりける人を初瀬の山おろし
うらみわびほさぬ袖だにあるものを

▲つの部(二枚)

筑波ねの峯より落つるみな川
月みれば千々に物こそ悲しけれ

▲しの部(一枚)

しのぶれど色に出にけり我が戀は

▲ゆの部(一枚)

夕ざれば門田の稻葉おどれて
由良の戸をわたら舟人舵をたえ

▲もの部(一枚)

百敷や古き軒端のしのぶにも
諸共にあはれと思へ山櫻

▲一枚札(ふ、さ、ほ、せ、む、す、め)

ふくからに秋の草木のしをるれば
ほごさなきつる方を眺むれば
瀬をはやみ岩にせかるゝ瀧川の
村雨の露もまだひぬ横の葉に
住の江の岸に寄る浪よるさへや
めぐりあひて見しやそれともわかぬ間に

『備考』一枚札とは最初の一宇にて取り得る札なり。餘程の研究をつまずんば取れず。

人こそみえね秋はきにけり

人づてならで云ふよしもがな
有明の月を待ら出づるかな
今日九重にはひぬるかな

未の松山波こさじとは
唐紅に水くるとは

あはれ今年の秋もいぬめり

我が衣手に雪はふりつゝ
ながくもがなと思ひけるかな
衣かたしき獨かもねん

しづ心なく花のちるらん
花ぞ昔の香に匂ひける

世を思ふゆゑに物思ふ身は
はげしかれどは祈らぬものを

戀に朽ちなん名こそ惜しけれ

戀ぞつもりて淵となりぬる
我が身ひごつの秋にはあらねど

物や思ふと人のごふまで
づらぬきごめぬ玉ぞ散りける

あしのまろやに秋風ぞ吹く
行方も知らぬこひの道かな

なほあまりある昔なりけり
花より外に知る人もなし

ラベ山風を風といふらん

いづくもおなじ秋の夕暮
たゞ有明の月ぞのこれ
われても未にあはんごぞ思ふ
霧たちのぼる秋の夕ぐれ

夢のかよひ路ひごめよくらん
雲かくれにし夜半の月哉

歌留多の遊びは耳と眼と手とを動かすものなり。耳で聞き、眼で札をさがし、手で取るものなり。この三動作が殆んど同時に行はるゝ人は上手なり。これ甚だ困難のことにして非常なる練習を要す、或る程度以上は敏捷の人に非んば上達しがたし。さはいへ鈍才ごとも練習次第にては名人となりうるなり。然れ共カルタも結局は智力の争ひとなる。

さてカルタ取りの準備出来し上は排列法の研究を要す。我が持札を出鱗目に排列するは感心できず、宜しく適當なる排列法を應用せざる可らず。次ぎに、普通行はるゝ排列の法を参考までに書いつけん。これを如何なる様に並べるかは、諸君の研究にまかす。此の如きは、よく筆紙のつく所にあらざるなり。排列法は「これだけ」なりと云ふに非す。諸君がこれらの諸法を巧みに應用して、新形式を定められんことを希望す。

(一) 読人による法

(二) 所属歌集による法

(三) 歌の性質による法

(四) 上の句による法

(五) 下の句による法

(六) 百人一首の順序による法

(三) 歌の性質による法

(四) 上の句による法

(一) 読み人に依つて排列する法

この法は作者即ち読み人の部類に依つて排列する法なり。天子の部とか、參議の部と云ふが如くに排列する法なり。この法は頗る面白きものにして、中々有利なれど、頗る面倒なるが故に初心者には適せず。さはいへ参考の爲めに読み人分けをかいつけん。

▲天子の部(八枚)

秋の田の……(天智)

春過ぎて……(持統)

筑波根の……(陽成)

君が爲春の野……(光孝)

心にもあらで……(三條)

瀬を早み……(崇徳)

人もをし……(後鳥羽)

百敷や……(順徳)

和田原溝ぎ……(法性寺)

あはれこも……(謙徳公)

和田原溝ぎ……(法性寺)

▲親王部(二枚)

百敷や……(順徳)

和田原溝ぎ……(法性寺)

▲大臣の部(六枚)

名にしおは……(三條右大臣)

花るそふ……(入道)

ほこゝぎす……(後徳大寺)

ほこゝぎす……(後徳大寺)

この度は……(菅家)

この度は……(菅家)

▲陸奥の……(河原左大臣)

名にしおは……(三條右大臣)

花るそふ……(入道)

ほこゝぎす……(後徳大寺)

ほこゝぎす……(後徳大寺)

この度は……(菅家)

この度は……(菅家)

▲世の中は常に……(鎌倉右大臣)

花るそふ……(入道)

ほこゝぎす……(後徳大寺)

ほこゝぎす……(後徳大寺)

ほこゝぎす……(後徳大寺)

ほこゝぎす……(後徳大寺)

ほこゝぎす……(後徳大寺)

▲大納言の部(二枚)

名にしおは……(三條右大臣)

花るそふ……(入道)

ほこゝぎす……(後徳大寺)

ほこゝぎす……(後徳大寺)

ほこゝぎす……(後徳大寺)

ほこゝぎす……(後徳大寺)

▲瀧の音は……(公任)

名にしおは……(三條右大臣)

花るそふ……(入道)

ほこゝぎす……(後徳大寺)

ほこゝぎす……(後徳大寺)

ほこゝぎす……(後徳大寺)

ほこゝぎす……(後徳大寺)

▲中納言の部(八枚)

名にしおは……(三條右大臣)

花るそふ……(入道)

ほこゝぎす……(後徳大寺)

ほこゝぎす……(後徳大寺)

ほこゝぎす……(後徳大寺)

ほこゝぎす……(後徳大寺)

▲かさゝぎの……(家持)

立わかれ……(行平)

三香原……(兼輔)

高砂の……(匡房)

高砂の……(匡房)

高砂の……(匡房)

高砂の……(匡房)

▲あひ見ての……(敦忠逢)

逢ふこその……(朝忠)

朝忠の……(朝忠)

朝忠の……(朝忠)

朝忠の……(朝忠)

朝忠の……(朝忠)

朝忠の……(朝忠)

▲來ぬ人を……(定家)

朝ぼらけ宇治……(定朝)

朝ぼらけ宇治……(定朝)

朝ぼらけ宇治……(定朝)

朝ぼらけ宇治……(定朝)

朝ぼらけ宇治……(定朝)

朝ぼらけ宇治……(定朝)

▲参議(四枚)

立わかれ……(行平)

三香原……(兼輔)

高砂の……(匡房)

高砂の……(匡房)

高砂の……(匡房)

高砂の……(匡房)

▲天の原……(仲麿)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

▲みよしの……(雅經)

淺茅生の……(等)

淺茅生の……(等)

淺茅生の……(等)

淺茅生の……(等)

淺茅生の……(等)

淺茅生の……(等)

▲非參議の部(四枚)

秋風に……(顯輔)

世の中よ……(俊成)

世の中よ……(俊成)

世の中よ……(俊成)

世の中よ……(俊成)

世の中よ……(俊成)

▲今はたゞ……(道雅)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

▲風そよぐ……(家隆)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

▲四位の部(八枚)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

▲千早振る……(業平)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

▲千早振る……(敏行)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

和田の原八十島……(笠)

御垣守……………(能宣)

うかりける……………(俊頬)

かくごだに……………(實方)

明ねれば……………(道信)

ながらへば……………(清輔)

かくごだに……………(基俊)

君が爲をしから……………(義孝)

契りおきし……………(基俊)

地下の部(十七枚)

白露に……………(朝康)

月みれば……………(千里)

心あてに……………(躬恒)

有明の……………(忠岑)

朝ばらけ有明……………(是則)

人はいざ……………(貫之)

山川に……………(列樹)

久方の……………(友則)

誰をかも……………(興風)

戀すてふ……………(忠見)

夏の夜は……………(深養父)

ふくからに……………(康秀)

忍ぶれど……………(兼盛)

由良の戸を……………(好忠)

契りきな……………(元輔)

淡路しま……………(兼昌)

風をいたみ……………(重之)

かくごだに……………(道信)

女房の部(二枚)

嘆きつゝ……………(道綱母)

忘れじの……………(三司の母)

宮女の部(十七枚)

花の色は……………(小町)

難波潟……………(伊勢)

忘らるゝ……………(右近)

あらざらん……………(和泉)

めぐりあひて……………(紫式部)

有馬山……………(三位)

やすらはで……………(赤染)

大江山……………(小式部)

いにしへの……………(伊勢太輔)

夜をこめて……………(清少)

うらみわび……………(相模)

春の夜の……………(周防)

音にきく……………(紀伊)

長からん……………(堀河)

なには江の……………(皇嘉門院別當)

見せばやな……………(般富門院)

吾が袖は……………(讚岐)

おはげなく……………(慈圓)

▲僧正の部(三枚)

天津風……………(遍照)

諸共に……………(行尊)

▲法師の部(九枚)

我が庵は……………(喜撰)

今こんご……………(素性)

あらし吹く……………(能因)

寂しさに……………(良選)

夜もすがら……………(俊成)

嘆けゑて……………(西行)

其他(四枚)

思ひわび……………(道因)

あし引の……………(人麿)

村雨の……………(寂蓮)

秋の田の……………(人麿)

田子の浦に……………(赤人)

これやこの……………(蟬丸)

奥山に……………(猿丸)

(二)所屬歌集によつて排列する法
これは所屬集によつて排列する方法にして頗る面倒なものなり。方法ごしても餘り感心出さず。さは
いへ参考迄に所屬集部類わけをかいつけおかん。

▲後撰集の部(八枚)

新古今集の部(十三枚)

春すぎて……………(田子の浦に)

めぐりあひて……………(秋風に)

きりぎりす……………(み吉野の)

かさゝぎの

▲拾遺集(十二枚)

小倉山……………(忘らるゝ)

忍ぶれど……………(戀すてふ)

逢ふことの……………(あはれとも)

八重葎……………(かくごだに)

嘆きつゝ……………(嘆きつゝ)

瀧の音は……足びきの……

▲古今集の部(二十四枚)

奥山に……天の原……我が庵は……花の色は……和田の原八十島……
天津風……陸奥の……君が爲め春……立ち別れ……千早振る……
住の江の……今こんこ……吹くからに……月みれば……このたびは……
山里は……心あてに……ありあけの……朝ばらけ有明……山川に……
久方の……誰をかも……なつの夜は……人はいざ……

▲續後撰集の部(二枚)

人もをし……もゝしきや……

▲千載集(十四枚)

朝ばらけ宇治……春の夜の……うかりける……契りおきし……長からん……
ほごゝぎす……思ひわび……世の中よ……夜もすがら……嘆けみて……
難波江の……見せばやな……我袖は……おほけなく……

▲金葉集の部(五枚)

大江山……もうごもに……夕されば……音にきく……淡路しま……

▲詞華集の部(五枚)

風をいたみ……御垣守……和田の原漕ぎ出で……瀬を早み……

▲後拾遺集(十二枚)

衷りきな……君がためをし……明ぬれば……あらざらん……有馬山……
やすらはで……よをこめて……今はたゞ……うらみわび……心にも……

▲歌の性質に依る法

あらし吹く……寂しさに……高砂の……

▲新勅撰集の部(四枚)

世の中は……花さそふ……こぬ人を……風をいたみ……

▲歌の性質に依る法

是はあまり感心の出来ざる法なり。例へば春、夏、秋、冬、羈旅、戀雜と云ふが如くに排列する法な
り。然れども前解にて承知せられしが如く、百人一首には戀歌多し。殆んど過半數は戀歌なりと云

ひつべし。即排列法としては、當を得しものに非す。

▲上句の頭文字による法

歌の上の句の頭文字によつて排列する法なり。最も容易なる排列なれど實戰上効力少なし。然
れども、この法を巧みに應用せば頗る有利なり。唯諸君の慎重なる研究を待つ。

▲下句の頭文字による法

是は下の句の頭文字によつて排列する法なり。カルタ連のうちには「下の句で並べるものは」さて輕
蔑するものあれど決して然らず。中々有利なる法なり。例へば上の句にては「あ」の字十七字あり。
これに反し下の句にては最多數の「ひ」すら僅かに十枚にすぎず。この點に於いては上の句法に優れ
り。又この下の句法には同形の札頗る多く敵の眼をくらまし往々敵をして失策せしむることあり。こ
れも一の利益に非すや。要は其人／＼の研究如何にあり。次ぎに参考の爲め下の句の頭文字を五十音
順にわけん。

▲ひの部(十枚)

人こそみえね秋はきにけり 人こそしらねかはくまもなし 人知れすことと思ひそめしか
人づてならでいふよしもがな 人目も草も枯れぬと思へば 人には告げよ海士のつり舟
人にしられてくるよしもがな 人の命のをしくもあるかな 人をもみをもうらみざらまし

ひるは消えつゝ物をこそおもへ

▲あの部(八枚)

有明の月を待ち出づる哉
あはでこの世をすぐしてよみや
あまりてなごか人の戀しき

▲いの部(七枚)

今一度の御幸またなん
いかに久しきものとかはしる
いづくもおなじ秋の夕ぐれ

みの部(七枚)

身をつくても逢はんぞと思ふ
みだれてけさは物をこそ思へ
みそきぞ夏のしるしなりけり

わの部(六枚)

我が衣手に雪は降りつゝ
我が身一つの秋にはあらねど
▲なの部(六枚)

なが／＼しよをひごりかもねん
名こそ流れてなほ聞えけれ
▲この部(六枚)

戀にくちなん名こそをしけれ
戀にくちなん名こそをしけれ

衣かたしきひごりかもねん

▲かの部(五枚)

掛しや袖のぬれもこそすれ
からくれなゐに水くゝるとは
よの部(四枚)

世を宇治山と人は云ふなり
吉野の里にふれる白雪

▲くの部(四枚)

雲のいづこに月やごるらん
碎けて物を思ふ頃かな

▲しの部(四枚)

白きをみれば夜ぞ更けにける
忍ぶることのよわりもぞする
▲はの部(三枚)

花よりほかに知る人もなし
松もむかしの友ならなくに

▲ふの部(三枚)

古里さむく衣うつなり
松もむかしの友ならなくに

▲もの部(三枚)

曉ばかりうきものはなし
あらはれ渡る瀬々のあじろぎ
海士の小舟の綱手かなしも
今一度のあふことものがな
いでそよ人を忘れやはする
みをつくしてや戀わたるべき
三笠の山に出でし月かも
みだれそめにし我れならなくに
身のいたづらになりぬべき哉
みだれそめにし我れならなくに
身のいたづらになりぬべき哉
我が身よにふるながめせしまに
われても末にあはんぞと思ふ
ながれもあへぬ紅葉なりけり
なほうらめしき朝ばらけかな
なほあまりある昔なりけり
こひしかるべき夜半の月かな
衣ほすてふ天の香具山

聲きくときぞ秋は悲しき

かこち顔なる我涙かな
かひなくたん名こそ惜しけれ

傾くまでの月をみしかな
世に逢坂の關はゆるさし

世を思ふゑに物思ふ身は
世に逢坂の關はゆるさし

雲井にまがふ沖つ白浪
雲かくれにし夜半の月かな

知るも知らぬも逢坂の關
しづ心なく花の散るらん

花ぞむかしの香に匂ひける
はげしかれとは祈らぬものを

まつごし聞かば今歸りこん
まだふみもみす天の橋立

富士の高根に雪はふりつゝ
あはれ今年の秋もいぬめり
蘆のまろやに秋風ぞ吹く
いく夜ねざめ須磨の關守
いづみきとてか戀しかるらん

紅葉のにしき神のまにく

物や思ふと人の間ふまで

もれ出る月の影のさやけさ

たの部(二枚)

唯有明の月ぞ残れる

たつたの川の錦なりけり

ひの部(二枚)

むべ山風を嵐といふらん

むかしは物を思はざりけり

うの部(二枚)

うしごみし世ぞ今はこひしき

うきにたえぬは涙なりけり

やの部(二枚)

山の奥にもしかぞなくなる

やくやもしはの身もこがれつゝ

けの部(二枚)

今日九重に匂ひぬる哉

今日を限りの命ともがな

ゆの部(二枚)

夢の通り路ひごめよくらん

行くへも知らぬ戀の道かな

おの部(二枚)

おきまどはせる白菊の花

乙女の姿しばしどゝめん

ご、ぬ、つ、ね、さ、き、す(各一枚)

ぬれにぞぬれし色はかはらじ

外山の霞たゞもあらなん

つらぬきごめぬ玉ぞ散りける

闇のひまさへつれなかりけり

さしもしらじなもゆる思ひを

末の松山なみこさじこは

霧たちのほる秋の夕暮れ

(五) 百人一首の歌の順序に排列する法なり。参考には解釋の所をみるとべし。

百人一首の排列法は以上六種のほか尙多あり。唯普通多く行はるゝ法をあげしのみ、この六種中初心者には上の句法?若しくは下の句法が適當なり、さはいへ必ずしもこの法によるの必要はない。諸君が巧みにこれらの諸法を應用して新形式をたつれば尙更可なり。これを並べる法は諸君の慎重なる研究に一任す。

第三 取り方法

歌留多の取り方の研究は頗る重大なり。如何にせば早く札を取り得る?モーションは如何にすべき?如何にせば読み手の音を早く聞きうるか。の研究を怠りては到底石手となれず、一寸したモーションの差にて失敗を招くこと仕合あり。普通行はるゝカルタ取の方法は

一、叩く法

二、刎ねる法

三、突く法

この他尚平手打、攫取り、搔去らひ、ボタ打等さまざまあれど、今は行はれず、これは卑劣極まる取

り方故排斥すべきなり。

一、叩く法は一本の指先で銳く札に觸る法なり。然れ共雙方の氣合の乗り來りし時には、叩くが如く

になるものなり、この法は武士的て面白し。

二、刎ねる法は指先きで札を刎ね出す法なり。この際には敵の陣形を亂さぬやうにすべきなり。近來

多く敵に類似の札ある時は、二枚も三枚もはね飛ばすことあり。これ甚だ卑劣な方法なり。かゝる

ことはなす可らず。敵の札を一枚も三枚も刎ね飛ばさぬやうにすべし。

三、この法は近來勝負争ひの結果出來しものなり。姿勢などはかまはぬ勝てさへすればよしとの主旨より出來し法なり。體をうつぶして左手にてさゝへ、右手を胸の前、眼のさきにひかへて、何時

とても取りうるやうに、構ふるなり。諸子はこの三方法中の一つを選んで練習すべきなり。體の位置などに關しては各自の研究を要す。筆紙のつくす所に非ざれば今は云はず。

第四 百人一首に對しての諸注意

(イ) 學生と歌留多

カルタは學生に對して至極適當なる遊戯なり。知らずくの間に文學的智識をう。熱心にこれが研究をなすは、うれし、然れ共學業を怠り勝ちにする傾向あり。余は唯學業の妨害となる範圍の練習を希望す。

東京カルタ會へ出て金牌を得んこ。仲間の者に勝ちたしこ。云ふが如き虚榮心をしてざる可らず。所謂黒人たらんと欲するの士は例外とし一般の人特に學生たるものにはかかる虚榮心をしてざる可らず。所學生たるものは、他人と試合するに當つて萬事モラしくなすべし。ゆめ卑劣行爲をなす勿れ。宜しく學生たるものゝ品格を重んすべし。

余は唯萬事「學生的」に行はれんことを希望す。

(ロ) カルタ會について

正月催うさるゝカルタ會に二種類あり。

(一) 高砂ご? 明星會ご? 云ふが如き團體。

(二) は一個人に依つて催うさるゝもの

今余の論せんと欲するは、前者に非すして、後者を指す、これが注意二、三をかいつけん。
一 從來カルタ會ご云へば、皆夜晚くなるものと思へり。甚しきに至つてはカルタ遊びに、一夜をあかすものあり。これ衛生上甚だ宜しからず。これが因となつて、神經衰弱症を起すものすらあり。此くの如くんば人の精神に慰安を與ふることも能はざるなり。さりとて晝間のカルタ會もあり氣乗りのせぬものなり。故におそらく十時? 十一時に閉會するやうにすべし。余か理想のカルタ會は、五時頃に開會し十時頃で閉會し、あと一時間位は茶でも呑んで談笑するにあり。兎に角く夜た。そく迄はすべからず。

(二) 男女混合でやるは甚だ喜ばしき事に非す。元來理性あるものゝみならば、混合も差し支へなければ往々不徳漢のある事を注意すべし。されど監督者あれば差し支へなし。監督者なくしての男女混合は頗る危険なり、絶対に禁止せざる可らず。

(三) 試合をするに當つては卑劣行爲をなすべからず。絶対的にアムバイアに服従せざる可らず。

(四) 主宰者は來會者の姓名を紙? 又は名刺に書きつけ、これを公平に組み合すべし。

(五) 少年をして監督者なくして夜分外出せしむる事は墮落の淵に陥らしむるの恐れあり、故に信用するに足る監督者ある時その他、少年をしてカルタ會へ出席せしむ可らず、墨子悲絲、楊朱泣岐、とは人生の危期を語るものに非ずして何ぞや、余は元祿會ご云へる少年教育機關を設うけて、こゝに八年の經驗に依り、信用するに足る監督者のある場合の他、絶対に少年をしてカルタ會へ出席せしむ可らずと敢えて云ふ。

要するに今カルタ會を催うさるゝ時は、夜更けぬ様にする事が肝要なり。

(ハ) 讀み手に對する注意

読み手は野球に於けるアムバイアに相當す、読み方如何に依つて取り手の氣は乗るものなり、読み手の読み方あしければ取の手の氣は乗らざるなり。即カルタを面白くさせるも、させざるも、読み手如何にあり読み手の責任や頗る重し。

然れども、そこらの原の野球チームがアムバイアを等閑にすると同じく、一般に読み手を等閑にするは大なる誤解なり。読み手は歌の意味をまちがへたり、又は非文學的の読み方をなすべからず。これに對する注意を左に

(一) 歌の本意を失はぬやうに讀むこと

(二) 八十島をハチジツトウ^{外山}をガイザン^{龍田川}をリウデンセン等と讀む可らず。

カルタは読み出しの一、二字多くも四、五字にて取るもの故読み出しは極めて明瞭にすべし。その要領は、上の句をつくりと読み下の句は多少早めてよむこと。

(三) 上の句の似寄りし所を明瞭に読み分くること。

「世の中は」世の中よの如く似寄りし所は、特に注意して明瞭に讀むべし。

(四) 歌は終まで読み通すべし。

歌は終りまで読み通すべきなり。上の句丈讀んで下の句を讀まぬと云ふ事は、甚だ宜しからず、息つきは上の句と、下の句のさかひめでなすべきなり。

(五) 空札を読み込むこと

読み出しは勿論、吟變りの時にも必ず空札を一枚読み込むべし、唯突然読み出すは大いにさくべき事なり。空札は百人一首中の歌にても、差し支へはなけれど、成るべく他の歌を讀むべし。空札は成るべく文學的の歌を、讀むべし通例

讀むからに秋の卿木のしをるれば

うべ山風を嵐と云ふらん

鯨ほの玄海灘をすぎゆけば

ゴビの砂漠に月宿るらん

先づ始め空一つよむ注意せよ

人に取られずあざやかに取れ

等を讀めど、何もこれに限つた事にはあらず。かゝる非文學的な歌は好ましがらず。むしろ

年をへて花の鏡となる水は

ちらかゝるをや曇るご云ふらん

などの方よし、要は唯諸君の好みにまかす。然れ共カルタは文學的遊戯なる事を忘る可らず。

(二) 審判官に対する注意。

勝負事は、審判官を要す、而して審判官は神聖にして犯すべからざるの權を有す。例へば野球をみよ、審判官の宣告に對してはキヤブテインといへども左右するを得ず。カルタに於ける審判官の權限も又無限なり。取り手は絶対的に、アンバイアの宣告に服従せざる可らず。かるが故に審判官は、公平なる體度を以て審判せざる可らず。而して宣告は水の流るゝが如くに與へざる可からず。要するに審判官は片時の間と雖も「公平でふ」ことを忘る可らず。審判官にして「公平」てふ心を失はゝ、其價値は零なり。審判官たるものは、ゆめ忘る可らず。

(ホ) カルタの札について
現今用ゐらるゝカルタ札に二種類あり。

- 一、文學的カルタ 従來行はれ居る札にて頗る文學的のものなり。字體は草書、
- 二、標準カルタ 東京カルタ會にて案出したるカルタなり。平假名で、活版すりにしたる札なり。

即二號活字總平假名を四行に配列したる札にして、如何にも非文學的のものなり。然れども「特徴のなき所が」せてもの、取どこならんか。

即かく二通りあり。カルタ其ものゝ性質より論せば、余の所謂文學的カルタの方よし。然れ共今の場合は詮方なし。諸君は標準カルタにて練習をすべし。標準カルタに東京カルタ會のと帝國カルタ會のとあり。勿論東京カルタ會の札を可こそす。

余は終りに望んで斷言す、カルタは元來高尚、文學的の遊びなりと、これを行ふの士は、其心得を忘る勿れ。

余は今日の標準カルタには賛成せず。反対する者は「特徴のない札だから」と云はん。然れ共此の如き非文學的な札は、カルタの性質上、宜しく排斥すべきなり。又眼の衛生上より論じても、今日の所謂標準カルタは排斥すべきなり。

1001975653

余の所謂文學的カルタ（草書でかいてあるもの）式の標準カルタこそ望ましけれ。余は東京カルタ會の士の「文學的カルタ」式の標準カルタを定められんことを希望す。

八八

〔完〕

